

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年3月30日
【事業年度】	第69期（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）
【会社名】	株式会社長府製作所
【英訳名】	CHOFU SEISAKUSHO CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 種田 清隆
【本店の所在の場所】	山口県下関市長府扇町2番1号
【電話番号】	(083) 248 - 2777 (代表)
【事務連絡者氏名】	総務部長 山下 学
【最寄りの連絡場所】	山口県下関市長府扇町2番1号
【電話番号】	(083) 248 - 2777 (代表)
【事務連絡者氏名】	総務部長 山下 学
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第65期	第66期	第67期	第68期	第69期
決算年月	2018年12月	2019年12月	2020年12月	2021年12月	2022年12月
売上高 (百万円)	45,725	45,228	43,515	44,858	49,792
経常利益 (百万円)	3,730	3,905	3,830	4,141	5,370
親会社株主に帰属する当期 純利益 (百万円)	2,670	1,836	2,607	2,913	3,866
包括利益 (百万円)	675	1,864	2,429	3,247	2,202
純資産額 (百万円)	124,164	124,916	126,234	128,300	128,579
総資産額 (百万円)	134,673	135,354	135,772	137,473	138,140
1株当たり純資産額 (円)	3,574.14	3,595.81	3,633.75	3,693.24	3,737.48
1株当たり当期純利益 (円)	76.86	52.88	75.05	83.88	111.55
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	92.2	92.3	93.0	93.3	93.1
自己資本利益率 (%)	2.15	1.47	2.08	2.29	3.01
株価収益率 (倍)	27.19	46.60	27.74	24.32	17.22
営業活動によるキャッ シュ・フロー (百万円)	4,130	4,243	3,671	4,525	2,918
投資活動によるキャッ シュ・フロー (百万円)	2,718	3,162	1,681	4,111	553
財務活動によるキャッ シュ・フロー (百万円)	1,965	1,171	1,071	1,341	1,953
現金及び現金同等物の期末 残高 (百万円)	3,063	2,958	3,853	2,942	4,493
従業員数 (人)	1,244	1,230	1,229	1,210	1,193
(外、平均臨時雇用者数)	(234)	(260)	(251)	(253)	(258)

(注) 1. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を当連結会計年度の期首から適用しており、当連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第65期	第66期	第67期	第68期	第69期
決算年月	2018年12月	2019年12月	2020年12月	2021年12月	2022年12月
売上高 (百万円)	34,174	34,206	33,528	34,763	44,675
経常利益 (百万円)	3,325	3,676	3,658	4,009	5,172
当期純利益 (百万円)	2,454	1,813	2,532	2,863	5,843
資本金 (百万円)	7,000	7,000	7,000	7,000	7,000
発行済株式総数 (千株)	35,980	35,980	35,980	35,980	34,739
純資産額 (百万円)	121,507	122,086	123,214	125,125	127,234
総資産額 (百万円)	128,085	128,761	129,798	131,409	136,627
1株当たり純資産額 (円)	3,497.66	3,514.35	3,546.82	3,601.85	3,698.39
1株当たり配当額 (円)	32.00	32.00	32.00	36.00	38.00
(うち1株当たり中間配当額)	(16.00)	(16.00)	(16.00)	(18.00)	(18.00)
1株当たり当期純利益 (円)	70.64	52.20	72.91	82.42	168.56
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	94.9	94.8	94.9	95.2	93.1
自己資本利益率 (%)	2.01	1.49	2.07	2.31	4.63
株価収益率 (倍)	29.59	47.20	28.56	24.75	11.40
配当性向 (%)	45.3	61.3	43.9	43.7	22.5
従業員数 (人)	1,001	979	973	960	1,144
(外、平均臨時雇用者数)	(131)	(156)	(159)	(166)	(233)
株主総利回り (%)	81.6	97.2	83.7	83.5	80.4
(比較指標: 配当込みT O P I X)	(84.0)	(99.2)	(106.6)	(120.2)	(117.2)
最高株価 (円)	2,654	2,591	2,635	2,283	2,113
最低株価 (円)	1,950	2,003	1,645	1,985	1,730

- (注) 1. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を当事業年度の期首から適用しており、当事業年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。
2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3. 最高株価及び最低株価は、2022年4月4日より東京証券取引所プライム市場におけるもので、それ以前は東京証券取引所第一部におけるものであります。

2【沿革】

年月	事項
1954年7月	資本金 500万円をもって株式会社長府製作所を設立 山口県経済農業協同組合連合会の長府工場を譲り受け農機具の製造開始
1963年5月	栃木県塩谷郡高根沢町に栃木工場を建設
1963年11月	全自動温水ボイラを開発し、セントラルヒーティング部門に進出
1967年2月	港町工場（下関市長府港町）建設
1971年11月	本社事務所を港町工場内に新築移転
1973年6月	才川工場（下関市長府扇町）建設
1974年3月	ステンレス浴槽の製造を開始し、住宅機器総合メーカーをめざす
1976年2月	家庭用ルームエアコン製造開始
1976年9月	滋賀工場建設
1977年9月	盛岡営業所開設
1979年1月	株式額面変更のため、1950年4月16日設立された株式会社長府製作所 （旧商号長府ボイラー株式会社）に吸収合併される
1979年9月	太陽熱温水器の製造開始 広島証券取引所に上場
1980年12月	香川工場建設
1981年3月	清原工場（宇都宮市）建設
1981年7月	本社事務所を才川工場内に移転
1983年4月	東京営業所開設
1983年9月	大阪営業所開設
1984年6月	ガス給湯器の製造開始
1985年3月	名古屋営業所開設
1985年7月	千葉営業所開設
1985年9月	栃木工場を清原工場へ統合し、宇都宮工場に改称
1986年10月	横浜営業所開設
1989年6月	人工大理石浴槽の製造開始
1991年7月	システムバスの製造開始
1992年10月	仙台営業所開設
1994年12月	本社事務所新築
1995年11月	沖縄・金沢営業所開設
1996年4月	福岡・岡山営業所開設
1997年3月	大宮営業所開設
1997年9月	広島営業所開設
1997年11月	東京証券取引所市場第二部に上場
1998年3月	本社に研究棟（技術センター）建設
1998年6月	東京証券取引所市場第一部に指定
2000年3月	落水式太陽熱温水器の製造開始
2002年3月	香川工場を本社工場へ統合
2002年10月	CO ₂ ヒートポンプ給湯機（エコキュート）製造開始
2003年2月	家庭用ガスコージェネレーションシステム（エコウィル）製造開始
2004年8月	大阪営業所を大阪支店に改称
2006年1月	東京支店開設
2007年1月	潜熱回収型石油給湯器（エコフィール）製造開始
2007年7月	サンポット株式会社の全株式取得
2008年8月	太陽熱利用給湯システム（エネワイター）の製造開始
2009年4月	ヒートポンプ式冷温水熱源機（エネフロー）の製造開始
2009年5月	家庭用燃料電池（エネファーム）の製造開始
2009年12月	ヒートポンプ式空調システム（床下エアコン）の製造開始
2010年4月	高効率ガスふる給湯器（エコジョーズ）製造開始

年月	事項
2011年3月	デシカント24時間換気システムの製造開始
2012年9月	松本営業所開設
2013年4月	大規模太陽光発電（メガソーラー）の発電開始
2015年3月	福岡支店開設
2015年12月	株式会社ノーリツとの資本・業務提携を締結
2017年3月	株式会社大阪テクノクラート（現・連結子会社）の全株式取得
2018年1月	エンジニアリング部門の新設
2020年1月	「おうち快適アプリ」サービス開始
2021年9月	長府バイオマス発電所に出資（2025年発電開始予定）
2022年4月	連結子会社サンポット株式会社を吸収合併 東京証券取引所の市場区分の見直しにより、東京証券取引所のプライム市場に移行する

（注） 当社は、1954年7月1日株式会社長府製作所として設立されましたが、株式の額面金額を変更するため、1950年4月16日設立の東洋電気工業株式会社（1978年9月18日長府ボイラー株式会社に商号変更）を形式上の存続会社とし、1979年1月1日を合併期日として吸収合併をおこない、商号を同日付で株式会社長府製作所に変更しております。

従って、上記の記載については、実質上の存続会社である株式会社長府製作所に関する事項について記載しております。

3【事業の内容】

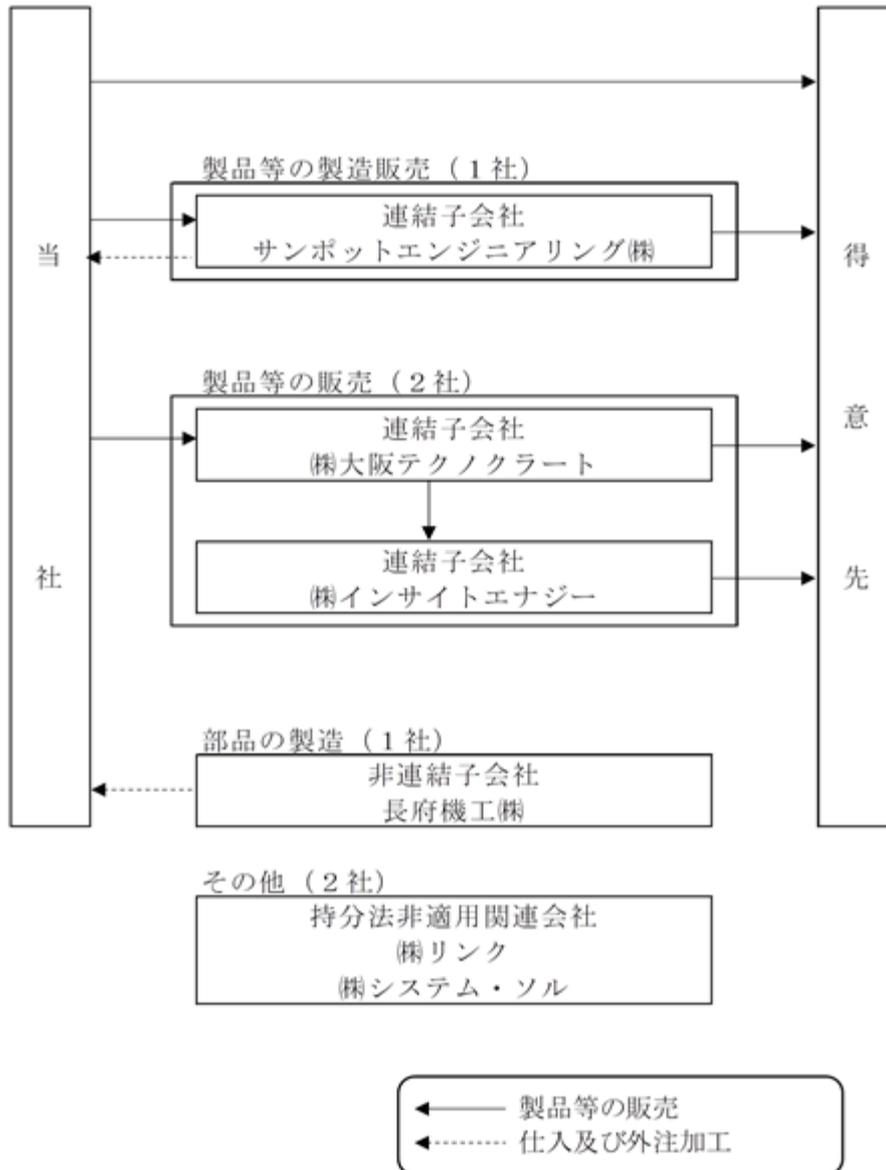
当社グループは、当社及び連結子会社3社（㈱大阪テクノクラート、㈱インサイトエナジー及びサンボットエンジニアリング㈱）、非連結子会社1社及び持分法非適用関連会社2社により構成されており、給湯機器（石油給湯機器・石油風呂釜・ガス給湯器・ガス風呂釜・電気温水器・エコキュート）・空調機器（ルームエアコン・FF式温風暖房機・温水暖房システム・石油ストーブ）・システム機器（システムバス・人工大理石浴槽・システムキッチン）・ソーラー機器（太陽熱温水器・ソーラー床下換気扇）及びその他の製造・販売を主たる業務としております。

当社グループの事業内容及び当社と関係会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりであります。

なお、当社グループは住宅関連機器の製造、販売の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

[事業系統図]

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有 割合(%)	関係内容
(連結子会社) サンポットエンジニア リング株式会社	北海道札幌 市東区	16	エンジニアリング部 門	100	役員の兼務 無
(連結子会社) 株式会社大阪テクノク ラート	大阪府堺市 堺区	40	エンジニアリング部 門	100	役員の兼務 有
(連結子会社) 株式会社インサイトエ ナジー	大阪府堺市 堺区	10	エンジニアリング部 門	100	役員の兼務 有

(注) 1. 主要な事業の内容欄には、製品の分類別の名称を記載しております。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2022年12月31日現在

従業員数(人)	1,193(258)
---------	------------

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時従業員数は()内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 当社グループは住宅関連機器の製造、販売の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

(2) 提出会社の状況

2022年12月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(才)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
1,144 (233)	40.9	15.8	5,895,987

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時従業員数は()内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

3. 当社は住宅関連機器の製造、販売の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

(3) 労働組合の状況

当社グループについて、当社の労働組合は、長府製作所労働組合と称し、1954年7月に結成され、2022年12月31日現在における組合員数は187人で上部団体には加盟しておりません。

なお、労使関係は円満な関係にあり、争議行為等特記すべき事項はありません。

子会社サンポットエンジニアリング株式会社、株式会社大阪テクノクラート及び株式会社インサイトエナジーの労働組合は結成されておりましたが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社は、創業以来「会社は絶えずより良い製品を作り、これを広く普及することに努力し、以って社会文化の向上に寄与する」を経営理念とし、事業活動を進めてまいりました。

今後も、「顧客満足第一」をモットーに社員全員が一丸となってより良い製品を提供してまいります。

(2) 経営戦略等

当社グループは、顧客満足度の向上と安定配当の継続を経営目標とし、中長期的に「営業利益」「経常利益」の増大に注力し、企業体質の強化に取り組んでまいります。

(3) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社は、グループ全体としての企業価値の上昇と財務基盤の強化を目指しております。

経営指標としては「営業利益」「経常利益」などの損益項目に加え、「自己資本比率」を重視しております。

(4) 経営環境並びに優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

今後のわが国経済は、ウィズコロナの下で各種政策の効果もあって、経済活動は正常化に向かっているものの、ウクライナ情勢の長期化による資源価格の高止まりに加え、金融資本市場の環境変化による世界的なインフレの加速が懸念され、景気の先行きについては予断を許さぬ状況となっております。

また、当社グループの商品需要とも関係の深い建築業界におきましては、住宅着工戸数は全体としては回復基調が継続していくと思われませんが、「持家」については建築資材の上昇や物価高等により住宅需要への影響が懸念されます。

このような経営環境のなか当社グループでは、日々変化する市場ニーズへの素早い対応と顧客満足度の向上を進めてまいります。営業部門におきましては、省エネ・高効率商品のシェアアップ、東北・北海道地方に強いSUNPOTブランドを有効活用し、当社製品のさらなるシェアアップを目指します。この他、海外での販売につきましては、環境負荷の低いヒートポンプ式熱源機の展開に注力してまいります。開発部門におきましては、人と地球にやさしい省エネ・高効率商品の開発を目指してまいります。生産・購買部門におきましては、全員がコスト意識をもって原価低減、生産性の向上に取り組み、グループをあげて経営全般の合理化と業績の向上に努力する所存であります。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 天候の状況について

当社グループの製品には、冷暖房機器のように天候の状況によって売上高に影響を受ける製品が含まれており、冷夏・暖冬等により当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当該リスクへの対応については、給湯機器、空調機器、システム機器、ソーラー機器・その他、エンジニアリング部門といった、多彩な製品ラインアップによりリスクの分散化を図っております。

(2) 原材料価格の変動について

当社グループ製品の製造原価は全般的に原材料費が過半を占めており、一部の製品にはステンレス、銅、アルミニウム、樹脂等が主要材料として使用されております。これら主要材料の価格動向が当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当該リスクへの対応については、作業工程等の見直しを行い、部材調達の効率化を図ってコストダウンの徹底に努めることや、販売価格に反映する努力を行っております。

(3) 新設住宅着工戸数について

当社グループの製品は一般家庭用住宅機器が主要な部分を占めており、新設住宅着工戸数の動向によって当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

当該リスクへの対応については、集合住宅市場、寒冷地市場、海外市場といった新しい市場の開拓による販路拡大に注力してまいります。

(4) 為替の変動について

当社グループは製品の輸出及び部材の輸入等を行っており為替の変動による影響を受けませんが、商社経由あるいは円建て取引が中心であり、直接的な影響よりも、円高による輸出の価格競争力の低下等によって需要が減少するリスク等間接的な影響を受ける可能性があります。

当該リスクへの対応については、為替変動の影響を最小限に抑えるように各種手段を講じ、リスクの軽減に努めております。

(5) 法的規制について

当社グループは製品リサイクル（資源有効利用促進法、家電リサイクル法等）、環境（特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律等）、省エネルギー（エネルギーの使用の合理化に関する法律等）等種々の法的規制に従って細心の注意を払って、製品の開発、製造、販売を行っておりこれらの製品に関し環境責任を負うリスクを抱えております。また将来さらに厳しい規制が課された場合に、製品の開発、製造に関する著しいコストアップ等が当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当該リスクへの対応については、適時に情報を収集することで、当社グループの業績に与える影響を早期に把握するよう努めております。

(6) 競合について

当社グループが事業を展開する給湯機器市場は、すでに成熟した市場であり、電気、ガス、石油の各エネルギーを熱源とする機器の市場共それぞれに数社が厳しく競合しています。競合による販売価格の低下が当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。また当社グループが今後、製品開発から販売、サービスに至るまで今まで以上の努力を傾注しても、他社がより優れた新技術を開発し、サービス向上に努めれば、当社グループが将来にわたって現在の地位を維持できる保証は無く、結果として収益の低下等当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当該リスクへの対応については、高付加価値で他社にはない独自の商品開発を目指し、様々な社会課題や環境に対応した製品の市場投入に努めてまいります。

(7) 製品の品質について

当社グループ製品は、所定の品質基準に基づき、安全面をはじめ品質保持に細心の注意を払って製造を行っておりますが、すべての製品に欠陥が発生しないという保証は有りません。もし欠陥が発生した場合製造物賠償責任保険でカバーしきれない賠償責任を負う可能性があり、多額のコスト負担のみでなく当社グループの社会的信用の低下を引き起こす可能性があります。

当該リスクへの対応については、不測の事態が発生した場合には、社長を本部長とする対策本部を設置し、迅速な対応を行い、損害の拡大を防止し、これを最小限に止める体制を整備しております。

(8) 新型コロナウイルス感染症拡大による影響について

当社グループは在宅勤務や、出張の制限、オンライン会議等、新型コロナウイルスの感染状況に応じて、社内外への感染拡大の防止を最優先し、事業活動を行っております。新型コロナウイルス感染症が当社グループの業績に影響を及ぼす可能性は、不確定要素も多いため予測が困難ですが、当該リスクが顕在化した場合、感染症対策の徹底を図り、これを最小限に止めるよう努めてまいります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社、以下同じ）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

なお、当連結会計年度より、「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。）等を適用しております。このため、前期比は異なる算定方法に基づいた数値を用いております。詳細については、「第5 経理の状況 1. 連結財務諸表等 注記事項（会計方針の変更）」をご参照ください。」

経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、新型コロナウイルス感染症に対するワクチン接種の普及により、社会経済活動の平常化に向けて動き始めていますが、ウクライナ情勢等を受けた資源・エネルギー価格の高騰や急速に進んだ円安の影響もあり、先行き不透明な状況が続いております。

当社グループの商品需要とも関係の深い建築業界におきましては、新設住宅着工戸数は「持家」については物価高や資材価格の高騰の影響もあり減少傾向が続いております。

このような状況の中、当社グループにおきましては、グループ全体で経営資源の効率化を進め、組織および事業の合理化を図っていくため、完全子会社であるサンボット株式会社を2022年4月1日に吸収合併いたしました。また、部品不足や原材料価格の高騰に対しては、各種調達の見直しによるサプライチェーンの再構築や製品への価格転嫁を進めてまいりました。

研究開発部門では、カーボンニュートラルの実現に向けた取り組みとして、太陽光・太陽熱・空気熱の再生可能エネルギーを利用する次世代型太陽熱利用システムや環境負荷の低いヒートポンプ式給湯器・熱源機の研究開発を行ってまいりました。

一方、生産・購買部門におきましては、原材料の高騰や円安による原価上昇など厳しい状況が続くなか、グループをあげて原価低減の推進と生産性の向上に取り組んでまいりました。

この結果、当連結会計年度の売上高は497億92百万円（前年同期比11.0%増）となりました。利益面につきましては、売上高の増加に加え、製品価格改定の影響もあり、営業利益は29億69百万円（同33.8%増）、経常利益は53億70百万円（同29.7%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は、38億66百万円（同32.7%増）となりました。

（給湯機器）

給湯機器につきましては、全体で219億14百万円（前年同期比16.0%増）となりました。

（空調機器）

空調機器につきましては、全体で202億9百万円（同4.8%増）となりました。

（システム機器）

システム機器につきましては、全体で13億79百万円（同8.2%減）となりました。

（ソーラー機器・その他）

ソーラー機器・その他につきましては、全体で28億10百万円（同4.6%減）となりました。

（エンジニアリング部門）

エンジニアリング部門につきましては、34億80百万円（同56.7%増）となりました。

財政状態の状況

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度末に比べ6億66百万円増加し、1,381億40百万円となりました。
負債は、前連結会計年度末に比べ3億87百万円増加し、95億60百万円となりました。
純資産は、前連結会計年度末に比べ2億78百万円増加し、1,285億79百万円となりました。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末の現金及び現金同等物（以下「資金」という。）の残高は44億93百万円（前年同期比52.7%増）となりました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は29億18百万円（同35.5%減）となりました。
これは主として、税金等調整前当期純利益や減価償却費などによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果得られた資金は5億53百万円（前年同期は41億11百万円の使用）となりました。
これは主として有価証券の売却や、投資有価証券の取得などによるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は19億53百万円（同45.7%増）となりました。
これは主に配当金の支払などによるものであります。

生産、受注及び販売の実績

当社グループの事業内容は、単一のセグメントによっているため、製品の分類別情報を記載しております。

a. 生産実績

当連結会計年度の生産実績を製品の分類別に示すと、次のとおりであります。

製品分類別	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	前年同期比(%)
給湯機器(百万円)	22,237	19.4
空調機器(百万円)	18,168	10.0
システム機器(百万円)	586	7.4
ソーラー機器・その他(百万円)	2,996	3.5
エンジニアリング部門(百万円)	-	-
合計(百万円)	43,987	13.2

(注)金額は販売価格によっております。

b. 受注実績

当社グループは見込生産を主体としているため受注実績の記載を省略しております。

c. 販売実績

当連結会計年度の販売実績を製品の分類別に示すと、次のとおりであります。

製品分類別	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	前年同期比(%)
給湯機器(百万円)	21,914	16.0
空調機器(百万円)	20,209	4.8
システム機器(百万円)	1,379	8.2
ソーラー機器・その他(百万円)	2,810	4.6
エンジニアリング部門(百万円)	3,480	56.7
合計(百万円)	49,792	11.0

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループの当連結会計年度の売上高を製品別に見ますと、給湯機器につきましては、製品価格改定や部品不足による納期遅延の解消もあり、全体で219億14百万円（前年同期比16.0%増）となりました。空調機器につきましては、欧州向けのヒートポンプ熱源機が売上を大きく伸ばし、全体で202億9百万円（同4.8%増）となりました。システム機器につきましては、システムバスの販売が振るわず、全体で13億79百万円（同8.2%減）となりました。ソーラー機器・その他につきましては、エネワイターの売上が増加しましたが、その他関連部品の売上が減少し、全体で28億10百万円（同4.6%減）となりました。エンジニアリング部門につきましては、受注が好調で34億80百万円（同56.7%増）となりました。

この結果、当連結会計年度の売上高は497億92百万円（同11.0%増）となりました。利益面につきましては、売上高の増加に加え、製品価格改定の影響もあり、営業利益は29億69百万円（同33.8%増）、経常利益は53億70百万円（同29.7%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は、38億66百万円（同32.7%増）となりました。

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度末に比べ6億66百万円増加し、1,381億40百万円となりました。主な増減としましては、現金及び預金が17億10百万円、原材料及び貯蔵品が13億80百万円、投資有価証券が11億61百万円、受取手形、売掛金及び契約資産が7億80百万円、商品及び製品が6億50百万円、繰延税金資産が4億64百万円増加し、有価証券が55億77百万円減少しました。

負債は、前連結会計年度末に比べ3億87百万円増加し、95億60百万円となりました。主な増減としましては、未払法人税等が3億71百万円増加し、退職給付に係る負債が2億45百万円減少しました。

純資産は、前連結会計年度末に比べ2億78百万円増加し、1,285億79百万円となりました。主な増減としましては、自己株式が19億35百万円減少し、その他有価証券評価差額金が18億14百万円減少しました。その結果、自己資本比率は93.1%となりました。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当連結会計年度におけるキャッシュ・フローの分析については、「第2〔事業の状況〕3〔経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析〕（1）経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」に記載しております。

当社グループの運転資金需要のうち主なものは、原材料の購入費用のほか、製造費、販売費及び一般管理費等の営業費用であります。投資を目的とした資金需要は、設備投資等によるものであります。

当社グループは、運転資金及び設備投資資金については、原則として自己資金で賄うこととしておりますが、必要に応じて金融機関からの借入も検討する方針であります。

重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたっては、必要な見積りを行っており、それらは資産・負債及び収益・費用の計上金額に影響を与えております。これらの見積りについては、過去の実績や現状等を勘案し合理的に判断しておりますが、実際の結果は、見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合があります。

当社グループの連結財務諸表において採用する会計方針は、第5（経理の状況）の連結財務諸表の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。

4【経営上の重要な契約等】

当連結会計年度において、経営上の重要な契約等の決定または締結は行われておりません。

5【研究開発活動】

当社グループは、これまで培ってきた燃焼技術および空調技術を基礎とし、幅広い技術開発を心がけ「人に優しい」と「環境に優しい」をテーマに研究開発を行っております。

現在の研究開発スタッフは合計141名で、これは総従業員の11.8%になっております。

当連結会計年度における研究成果としては、「減災」「環境」「健康」「利便性」を開発コンセプトに脱炭素社会実現に向けた環境にやさしく高効率な製品の研究開発を行ってまいりました。

当連結会計年度における研究開発費の総額は1,325百万円となっております。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループでは、営業拠点の充実や、生産設備、研究設備の増強、各事業所における環境設備等を中心に1,279百万円の設備投資を実施しました。

主な投資として、新製品金型代184百万円、社員寮新築工事284百万円などであります。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2022年12月31日現在

事業所所在地	設備の内容	帳簿価額					従業員数(人)
		建物 (百万円)	機械及び装置 (百万円)	土地 (百万円) (面積千㎡)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
本社工場 山口県 下関市	生産設備 研究設備 販売設備	1,078	1,313	2,562 (260)	258	5,213	430
滋賀工場 滋賀県 野洲市	生産設備 販売設備	203	283	711 (96)	36	1,235	138
宇都宮工場 栃木県 宇都宮市	生産設備 研究設備 販売設備	450	323	1,898 (112)	87	2,759	209
花巻工場 岩手県 花巻市	生産設備 販売設備	674	39	185 (37)	84	910	117
営業所他	販売設備	2,336	22	6,936 (28)	39	9,334	250
その他		1,043	229	2,159 (91)	24	3,456	-
計		5,786	2,211	14,453 (626)	531	22,985	1,144

(注) 1. 投下資本は、有形固定資産の帳簿価額で示しており、建設仮勘定は含んでおりません。

2. 帳簿価額のうち「その他」は構築物、車両運搬具、工具、器具及び備品並びにリース資産の合計であります。

3. 事業所のうちその他とは、倉庫、寮等であります。

4. 帳簿価額は、内部取引に伴う未実現利益消去前の金額を記載しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	77,750,000
計	77,750,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2022年12月31日)	提出日現在発行数 (株) (2023年3月30日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	34,739,312	34,739,312	東京証券取引所 プライム市場	単元株式数100株
計	34,739,312	34,739,312	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額 (百万円)	資本準備金残 高 (百万円)
2022年8月31日 (注)	1,241,188	34,739,312	-	7,000	-	3,552

(注) 発行済株式総数1,241,188株の減少は自己株式の消却による減少であります。

(5) 【所有者別状況】

2022年12月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満 株式の状 況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の法 人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 (人)	-	22	18	195	125	2	6,425	6,787	-
所有株式数 (単元)	-	81,477	798	149,159	74,777	2	41,008	347,221	17,212
所有株式数 の割合 (%)	-	23.46	0.23	42.96	21.54	-	11.81	100	-

(注) 1. 自己株式336,600株は、「個人その他」に3,366単元を含めて記載しております。

2. 「単元未満株式の状況」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が20株含まれております。

(6)【大株主の状況】

2022年12月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を 除く。)の総 数に対する所 有株式数の割 合(%)
JP MORGAN CHASE BANK 380055 (常任代理人 株式会社みずほ銀 行決済営業部)	270 PARK AVENUE, NEW YORK, NY 10017, UNITED STATES OF AMERICA (東京都港区港南2丁目15番1号)	5,056	14.69
長府物産株式会社	山口県下関市長府港町8番39号	4,313	12.53
株式会社長府精機	山口県下関市長府港町8番39号	4,097	11.91
株式会社長府共済会	山口県下関市長府港町8番39号	3,174	9.22
日本マスタートラスト信託銀行株 式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	2,243	6.52
株式会社西日本シティ銀行	福岡県福岡市博多区博多駅前3丁目1番1号	1,734	5.04
株式会社山口銀行 (常任代理人 日本マスタートラ スト信託銀行株式会社)	山口県下関市竹崎町4丁目2番36号 (東京都港区浜松町2丁目11番3号)	1,723	5.01
株式会社ノーリツ	兵庫県神戸市中央区江戸町93番	1,079	3.13
明治安田生命保険相互会社 (常任代理人 株式会社日本カス トディ銀行)	東京都千代田区丸の内2丁目1番1号 (東京都中央区晴海1丁目8番12号)	722	2.10
福山通運株式会社	広島県福山市東深津町4丁目20番1号	692	2.01
計	-	24,837	72.19

(注) 2017年12月11日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書において、ファースト・イーグル・インベ
ストメント・マネジメント・エルエルシーが2017年12月6日現在で以下の株式を所有している旨が記載され
ているものの、当社として2022年12月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株
主の状況には含めておりません。

なお、その大量保有報告書の内容は次のとおりであります。

大量保有者	ファースト・イーグル・インベストメント・マネジメント・エルエル シー
住所	アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市アベニュー・オブ・ ジ・アメリカズ1345
保有株券等の数	株式 5,849,450株
株券等保有割合	16.26%

(7)【議決権の状況】
【発行済株式】

2022年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 336,600	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 34,385,500	343,855	-
単元未満株式	普通株式 17,212	-	-
発行済株式総数	34,739,312	-	-
総株主の議決権	-	343,855	-

(注) 「単元未満株式」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が20株含まれております。

【自己株式等】

2022年12月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
(株)長府製作所	下関市長府扇町2番1号	336,600	-	336,600	0.97
計	-	336,600	-	336,600	0.97

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2022年8月9日)での決議状況 (取得期間2022年8月22日~2023年2月28日)	500,000	1,100,000,000
当事業年度前における取得自己株式	-	-
当事業年度における取得自己株式	336,600	672,902,700
残存決議株式の総数及び価額の総額	163,400	427,097,300
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	32.7	38.8
当期間における取得自己株式	163,400	332,758,400
提出日現在の未行使割合(%)	-	-

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	-	0
当期間における取得自己株式	-	-

(注) 当期間における取得自己株式には、2023年3月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	1,241,188	2,607,995,778	-	-
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
保有自己株式数	336,600	-	500,000	-

(注) 1. 当期間における保有自己株式には、2023年3月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

2. 当事業年度における消却の処分を行った取得自己株式は、2022年8月9日開催の取締役会決議により、2022年8月31日に実施した自己株式の消却であります。

3【配当政策】

当社は、長期にわたり安定的な経営基盤の確保に努めるとともに、配当についても安定的な配当の継続を重視し、業績や将来の見通し、資金状況、会社を取り巻く環境を勘案して経営体質強化のため、内部留保の充実に努め、総合的に判断して実施すべきものと考えております。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の配当につきましては、上記方針に基づき当期は1株当たり38円の配当（うち中間配当18円）を実施することを決定しました。

内部留保資金につきましては、事業拡大のための生産能力増強や、業界における競争激化に対処するためコスト競争力を高め、市場ニーズに応える商品開発、技術開発に有効投資してまいりたいと考えております。

当社は、「取締役会の決議により、毎年6月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2022年8月9日 取締役会決議	625	18
2023年3月24日 定時株主総会決議	688	20

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、経営理念に基づき、変動する社会、経済環境に対応した経営の意思決定の迅速化と、経営の健全性の向上を図り、ステークホルダーの期待に応え、企業価値を持続的に高めていくことが、当社の基本的な考え方であり、経営の最重要課題のひとつであると認識しております。

その実現のために、コーポレートガバナンス・コードを軸に、コーポレートガバナンスの充実に取り組むよう努めることを基本方針としております。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

a. 企業統治の体制の概要

当社は、監査・監督機能とコーポレート・ガバナンス体制の一層の強化およびさらなる経営の健全性と透明性の向上を目的として、監査等委員会設置会社を採用しております。

取締役会は、代表取締役社長を議長とし、取締役10名（うち社外取締役2名）で構成され、毎月1回の定例取締役会のほか、必要に応じて臨時取締役会を開催し、法令で定められた事項や経営に関する重要事項を決定しており、経営全般の指揮監督を行っております。なお、構成員の氏名は「(2) 役員の状況 役員一覧」に記載しております。

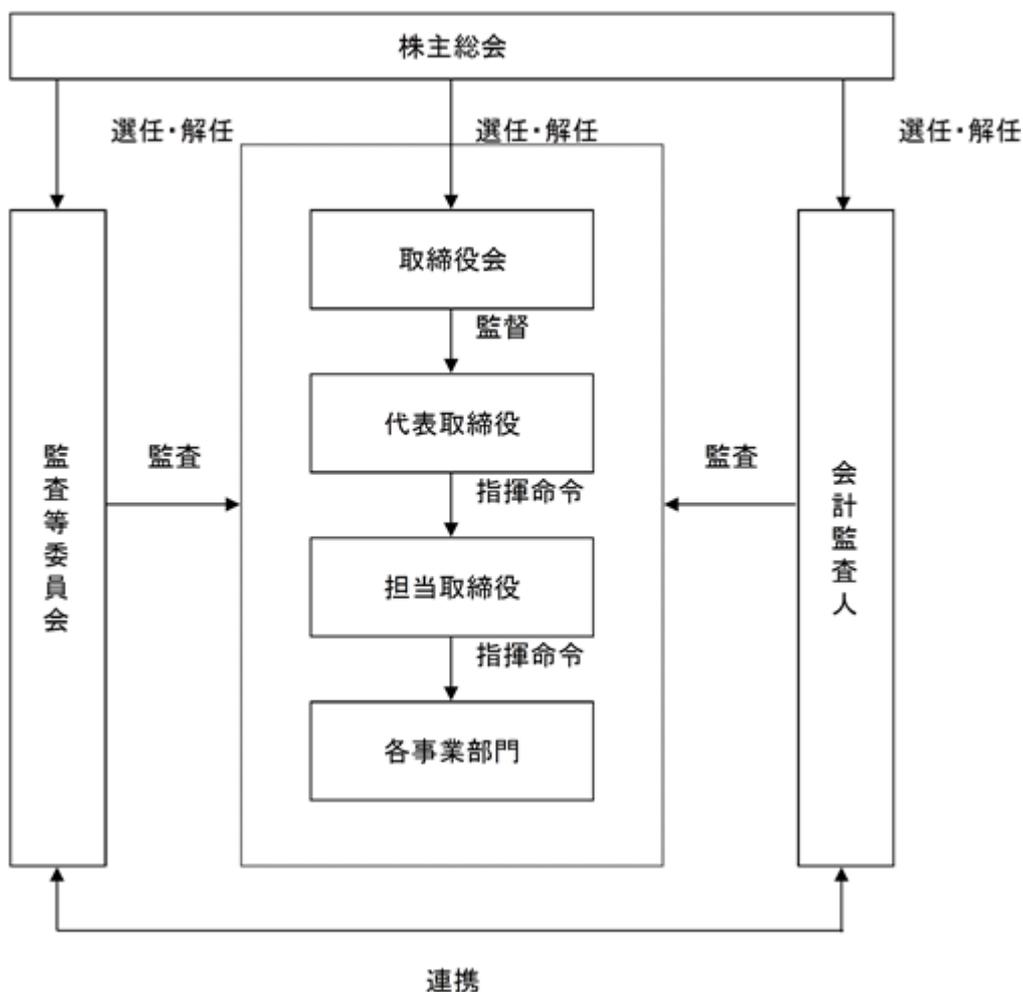
監査等委員会は、常勤の監査等委員を議長とし、監査等委員3名（うち社外取締役2名）で構成され、法令・定款で定められた事項のほか、監査方針、監査計画、監査方法を定め、会社の健全な経営に資するため、客観的な立場から職務の執行について監査を実施しております。なお、構成員の氏名は「(2) 役員の状況 役員一覧」に記載しております。

b. 当該体制を採用する理由

当社におきましては、経営監視機能の客観性及び中立性を確保するため、監査等委員である取締役3名のうち社外取締役2名を選任しております。専門的な知識・経験による助言及び客観的な立場による監督により、経営監視が十分機能する体制が整っていることから現状の体制としております。

当社のコーポレート・ガバナンス体制の概要は、下記のとおりです。

コーポレート・ガバナンスの体制図



企業統治に関するその他の事項

当社は、取締役会において、業務の適正を確保するための体制（内部統制システム基本方針）について、下記のとおり決議しております。

1. 取締役の職務の執行にかかる情報の保存および管理に関する体制
取締役の職務の執行に係る情報については、保存すべき情報の内容に応じて、検索性の高い状態で保存・管理するための手順を、文書管理規程に定める。
2. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - (1) 当社は、当社の業務執行に係るリスクとして、会社の存続にかかわる重大な事案の発生等によるリスクを認識し、その把握と管理、個々のリスクについての体制を整備する。
 - (2) 各事業部門は、それぞれの部門に関するリスクの管理をおこなう。不測の事態が発生した場合には、社長を本部長とする対策本部を設置し、迅速な対応を行い、損害の拡大を防止し、これを最小限に止める体制を整備する。
3. 取締役の職務の執行が効率的におこなわれることを確保するための体制
 - (1) 取締役の職務の執行が効率的に行なわれることを確保するための体制の基礎として、取締役会を定時に開催するほか、必要に応じて適宜随時に開催するものとし、当社の経営方針及び経営戦略に関わる事項など一切の事項について、審議を経て執行決定を行うものとする。
 - (2) 取締役会の決定に基づく業務執行については、取締役会規程および職務分掌規程にもとづいて行なう。
4. 取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
 - (1) 取締役会において、社員等（取締役および使用人をいう。以下同じ。）の職務の執行が法令および定款に適合し、かつ社員等が当社の社会的責任および企業倫理を果たすよう行動するため、長府製作所行動基準としてコンプライアンス規程を定める。
 - (2) 長府製作所行動基準の履行状況を確認するため、総務担当役員は、コンプライアンス体制の構築および運用を行なう。また、内部通報の受付窓口を総務部に設置し、不正行為等の早期発見、是正に努める。
 - (3) 市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会勢力および団体とは一切の関係を持たず、介入が疑われる場合は直ちに取締役会に報告し、会社全体の問題として方針を定め、不当な利益を付与することがないように毅然とした態度で対応する。
5. 会社ならびにその親会社および子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
総務部は、企業集団全体のコンプライアンス体制の構築に努め、適切に運用する。
6. 監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項
当社は、監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合、必要に応じ人員を配置することができる。
7. 前号の使用人の取締役からの独立性に関する事項
前号により監査等委員会の職務を補助すべき者として配置された使用人の人事異動、人事評価および懲戒に関しては、監査等委員会の事前の同意を得るものとする。
8. 取締役および使用人が監査等委員会に報告をするための体制その他の監査等委員会への報告に関する体制
社員等は、当社の業務または業績に影響を与える重要な事項について、監査等委員会にその都度報告する。
9. 監査等委員会へ報告した者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
当社は、監査等委員会に報告を行った者に対し、報告を行ったことを理由とするいかなる不利益な処遇、不当な処分を行わない。
10. 監査等委員会の職務執行のための費用又は債務の処理に係る方針に関する事項
当社は、監査等委員会の職務執行のための費用等については、必要でない限り認められた場合を除き、その都度負担する。

11. その他監査等委員会の監査が実効的におこなわれることを確保するための体制

監査等委員は取締役会に出席し、適宜取締役と意見交換し、適切な意思疎通及び効果的な監査業務の遂行を行なう。

取締役の定数

当社の取締役は12名以内とし、取締役のうち監査等委員である取締役は3名以上とする旨を定款に定めております。

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、監査等委員である取締役とそれ以外の取締役とを区別して、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及びこの選任決議は、累積投票によらない旨を定款に定めております。

株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年6月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。

自己の株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって、自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己の株式を取得することを目的とするものであります。

役員等賠償責任保険契約の内容の概要

当社は、役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が負担することになる損害賠償金などを当該保険契約により補填することとしております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性10名 女性 - 名 (役員のうち女性の比率 - %)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役会長 (代表取締役)	川上 康男	1946年12月21日生	1971年2月 当社入社 1983年4月 当社東京営業所長 1985年3月 当社取締役東京営業所長 1987年3月 当社取締役宇都宮工場長 1997年12月 当社取締役社長(代表取締役) 2012年3月 当社取締役会長(代表取締役)(現任)	(注)3	2,915
取締役社長 (代表取締役)	種田 清隆	1955年2月3日生	1979年3月 当社入社 2005年4月 当社技術部次長 2006年4月 当社技術部長 2008年3月 当社取締役技術部長 2014年4月 当社常務取締役 2018年5月 当社専務取締役 2019年3月 当社取締役社長(代表取締役)(現任)	(注)3	32
常務取締役	川上 康弘	1962年7月1日生	2004年10月 当社入社 2011年4月 当社総務部長 2014年3月 当社取締役総務部長 2017年2月 当社取締役滋賀工場長 2021年2月 当社取締役営業部長 2021年7月 当社取締役営業部長兼福岡支店長 2022年1月 当社取締役営業部長 2023年3月 当社常務取締役(現任)	(注)3	64
取締役 花巻工場 工場長	和田 健	1957年4月28日生	1982年3月 当社入社 2010年4月 当社宇都宮工場営業部長 2013年1月 当社営業部長 2013年3月 当社取締役営業部長 2015年3月 当社取締役営業部長兼福岡支店長 2016年3月 当社取締役営業部長 2021年2月 当社取締役 サンポット(株)出向 2021年3月 同社常務取締役 2022年4月 当社取締役花巻工場長(現任)	(注)3	30
取締役 東京支店長	林 徹郎	1960年8月21日生	1985年4月 当社入社 2010年4月 当社開発部長 2013年10月 当社東京支店長 2014年3月 当社取締役東京支店長(現任)	(注)3	29
取締役 宇都宮工場長	三久保 忠俊	1966年1月14日生	1995年3月 当社入社 2016年3月 当社滋賀工場営業部長 2018年1月 当社滋賀工場営業部長兼大阪支店長 2019年6月 当社宇都宮工場営業部長 2021年3月 当社取締役宇都宮工場営業部長 2023年3月 当社取締役宇都宮工場長(現任)	(注)3	34
取締役	西島 一幸	1970年1月1日生	1994年4月 当社入社 2017年3月 (株)大阪テクノクラート出向 同社常務取締役 2018年10月 当社部長待遇 2021年3月 当社取締役(現任) 2022年3月 (株)大阪テクノクラート代表取締役社長(現任)	(注)3	10

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役 (監査等委員)	伊牟田 茂	1961年4月28日生	1984年3月 当社入社 2015年7月 当社技術部長 2022年3月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)4	40
取締役 (監査等委員)	山元 浩	1958年3月1日生	1985年4月 弁護士登録 1988年4月 事務所開業 2000年3月 当社監査役に就任 2016年3月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)4	-
取締役 (監査等委員)	棕梨 敬介	1970年4月11日生	1995年4月 ㈱山口銀行入行 2019年6月 ㈱山口フィナンシャルグループ 執行役員 2020年6月 同社代表取締役社長グループCEO 2021年6月 同社代表取締役社長CEO(現任) 2022年3月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)4	-
計					3,154

- (注)1. 山元浩及び棕梨敬介は、社外取締役であります。
2. 伊牟田茂は常勤監査等委員であります。情報収集その他監査の実効性を高め、監査・監督機能を強化するために常勤の監査等委員を選定しております。
3. 2023年3月24日開催の定時株主総会の終結の時から1年間
4. 2022年3月25日開催の定時株主総会の終結の時から2年間

社外役員の状況

当社の社外取締役は2名で、いずれも監査等委員である取締役であります。

社外取締役の山元浩氏は、山元浩法律事務所の所長であります。当社と山元浩法律事務所とは、特別な関係はありません。

社外取締役の棕梨敬介氏は、㈱山口フィナンシャルグループ代表取締役社長 グループCEOであります。㈱山口フィナンシャルグループの子会社山口銀行は当社の大株主であり、当社は㈱山口銀行と借入等の取引を行っております。なお、山元浩氏及び棕梨敬介氏は、金融商品取引所の定めに基づく独立役員であります。

当社は、社外取締役を選任するための独立性に関する基準又は方針として明確に定めたものではありませんが、その選任に際しては、経歴や当社との関係を踏まえて、当社経営陣から独立した立場で社外役員としての職務を遂行できる十分な独立性が確保できることを個別に判断しております。

社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

当社の内部監査につきましては、当社の業務が、法令や企業理念、社内規程に従って適正かつ効率的に遂行されているか等について評価・検証するため、必要に応じて内部監査室(1名)が監査等委員、会計監査人と連携をとりながら、業務監査及び指導を行っております。

監査等委員会監査につきましては、各監査等委員が監査等委員会規程に準拠し、当期の監査方針、計画等に従い、取締役会その他重要な会議に出席する他、取締役等からその職務の執行状況を聴取するなど、適正な監査を行っております。

また、監査等委員は会計監査人から監査計画、監査報告等を受けるほか、必要に応じて情報交換を行い相互連携に努めております。

(3) 【監査の状況】

監査等委員会監査の状況

監査等委員会監査につきましては、各監査等委員が監査等委員会規程に準拠し、当期の監査方針、計画等に
従い、取締役会その他重要な会議に出席する他、取締役等からその職務の執行状況を聴取するなど、適正な監
査を行っております。

また、監査等委員は会計監査人から監査計画、監査報告等を受けるほか、必要に応じて情報交換を行い相互
連携に努めております。

当事業年度において当社は監査等委員会を12回開催しており、個々の監査等委員の出席状況については次の
とおりであります。

役職名	氏名	開催回数	出席回数
取締役(監査等委員)	山元 浩	12回	12回
取締役(監査等委員)	大枝 明	2回	2回
取締役(監査等委員)	吉村 猛	2回	2回
取締役(監査等委員)	伊牟田 茂	10回	10回
取締役(監査等委員)	椋梨 敬介	10回	10回

(注) 1. 山元浩氏及び椋梨敬介氏は、社外取締役であります。

2. 2022年3月25日開催の定時株主総会をもって大枝明氏及び吉村猛氏は監査等委員である取締役を退
任しております。

3. 2022年3月25日開催の定時株主総会をもって伊牟田茂氏及び椋梨敬介氏が新たに監査等委員である
取締役に選任され就任しております。

4. 伊牟田茂氏は常勤監査等委員であります。

(監査等委員会における主な検討事項)

当事業年度において、監査等委員会における主な検討事項は以下のとおりであります。

- ・ 監査方針、監査計画、職務の分担
- ・ 内部統制システムの構築及び運用の状況
- ・ 会計監査人の監査方法及び結果の相当性
- ・ 取締役及び使用人等の職務執行状況

(常勤監査等委員の活動状況)

常勤監査等委員は、取締役会以外の重要な会議等への出席や、内部監査室と連携し、取締役及び使用人等
の職務執行状況等、日常的に情報収集や意見交換に努め、他の監査等委員と共有することで監査の実効性を
高めております。

内部監査の状況

当社の内部監査につきましては、当社の業務が、法令や企業理念、社内規程に従って適正かつ効率的に遂行
されているか等について評価・検証するため、必要に応じて内部監査室(1名)が監査等委員、会計監査人と
連携をとりながら業務監査及び指導を行っております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

仰星監査法人

b. 継続監査期間

2012年以降

c. 業務を執行した公認会計士

平塚 博路

稲積 博則

継続監査年数につきましては、いずれも7年以内であるため記載を省略しております。

d. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士 8 名、会計士試験合格者等 3 名であります。

e. 監査法人の選定方針と理由

監査等委員会は、会計監査人の独立性、専門性、適格性、品質管理体制及び職務遂行体制の適切性、会計監査の実施状況、継続監査年数及び監査報酬等の要素を個別に確認したうえで総合的に判断し、会計監査人を選定しております。

監査等委員会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められた場合は、検討のうえ、監査等委員全員の同意により会計監査人を解任いたします。この場合、監査等委員会が選定した監査等委員は、解任後最初に招集される株主総会において、会計監査人を解任した旨及びその理由を報告いたします。

また、監査等委員会は会計監査人の職務の執行に支障がある場合、その他必要があると判断した場合には、会計監査人の解任または不再任に関する議案の内容を決定いたします。

f. 監査等委員会による監査法人の評価

監査等委員会は、会計監査人が独立の立場を保持し、かつ、適正な監査を実施しているかを監視及び検証するとともに、会計監査人からその職務の執行状況について報告を受けております。また、会計監査人から「職務の遂行が適正に行われることを確保するための体制」（会社計算規則第131条各号に掲げる事項）を「監査に関する品質管理基準」（2005年10月28日企業会計審議会）等に従って整備している旨の通知を受け、これらの事項を考慮して総合的に評価しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	26	-	33	-
連結子会社	7	-	-	-
計	33	-	33	-

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに属する組織に対する報酬（a.を除く）

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬は、監査日数、当社の規模・事業の特性等を総合的に勘案し、決定しております。

e. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査等委員会は、会計監査人の監査計画の内容、職務の遂行状況、報酬見積りの算出根拠などが適切であるかどうかについて必要な検証を行った結果、妥当であると判断し、会計監査人の報酬等につき会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員報酬等の内容の決定に関する方針等

当社は、取締役会において、取締役の報酬等の決定方針について、下記のとおり決議しております。また、取締役会は、当事業年度にかかる取締役の個人別の報酬等について、報酬等の内容が取締役会で決議された決定方針と整合していることを確認しており、当該決定方針に沿うものであると判断しております。

個別の取締役（監査等委員であるものを除く）の報酬等の決定については、株主総会で決議された報酬限度額の範囲内で、独立社外取締役を含む取締役会での協議を経て、代表取締役に再一任する。当社は明確な業績連動報酬は採用していないが、基本報酬の個人配分ならびに業績を反映した賞与を支給し、その支給の可否および支給額は、代表取締役が総合的に勘案して決定する。監査等委員である取締役の報酬等については、株主総会で決議された報酬限度額の範囲内で、監査等委員である取締役の協議を経て決定する。

取締役の個人別の報酬等の内容についての決定に関する事項

当社においては、取締役会の決議に基づき、代表取締役川上康男および代表取締役種田清隆の両氏が取締役の個人別の報酬額の具体的内容を決定しております。両氏に本権限を委任した理由は、当社の業績・職責等を含めた状況を総合的に勘案した評価をおこなうには代表取締役が適していると判断したためであります。

当事業年度に係る報酬等の総額等

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）			対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	賞与	退職慰労金	
取締役(監査等委員を除く。) (社外取締役を除く。)	84	58	26	-	9
取締役(監査等委員)(社外取締 役を除く。)	7	7	-	-	2
社外役員	6	6	-	-	3

- (注) 1. 取締役の報酬等の総額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まれておりません。
2. 取締役の報酬限度額は、2016年3月25日開催の第62回定時株主総会において、取締役（監査等委員を除く）について年額1億5,000万円以内（ただし、使用人分給与は含まない。）、取締役（監査等委員）について月額200万円以内と決議いただいております。当該定時株主総会終結時点の取締役（監査等委員を除く）の員数は7名、取締役（監査等委員）の員数は3名であります。
3. 対象となる役員の員数には、2022年3月25日開催の第68回定時株主総会終結の時をもって退任した取締役（監査等委員）2名を含んでおります。
4. 対象となる役員の員数には、2023年3月24日開催の第69回定時株主総会終結の時をもって退任した取締役（監査等委員を除く。）2名を含んでおります。

連結報酬等の総額が1億円以上である者の連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、専ら株式の変動または株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする投資株式を「純投資目的である投資株式」に区分し、それ以外の目的で保有する投資株式を「純投資目的以外の目的である投資株式」に区分しております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

- a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、保有先企業の動向、取引の状況、当該保有株式の市場価額等の状況を踏まえて、当該企業との業務提携の更なる強化や、安定的な取引関係の維持・強化を図るなど、当社の企業価値向上に必要と判断される場合に株式を政策的に保有します。

また、主要な政策保有株式については、そのリターンとリスク等を踏まえた中長期的な観点から、検証を行い、継続保有の是非を検討し、これを反映した保有の目的等について取締役会で具体的な説明を行っております。

- b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	8	1,061
非上場株式以外の株式	21	8,390

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	3	93	金融取引、財務取引の維持・強化及び連結子会社の吸収合併の為
非上場株式以外の株式	7	46	取引先持株会を通じた株式の取得及び連結子会社の吸収合併の為

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	1	1,000
非上場株式以外の株式	-	-

- c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)ノーリツ	1,520,000	1,520,000	業務提携関係の維持・強化の為	有
	2,194	2,550		
福山通運(株)	587,373	587,373	取引関係の維持・強化の為	有
	1,800	2,305		
(株)山口フィナンシャルグループ	1,797,000	1,797,000	金融取引、財務取引の維持・強化の為	無(注2)
	1,547	1,209		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)西日本フィナン シャルホールディ ングス	593,204	593,204	金融取引、財務取引の維持・強化の為	無(注2)
	571	441		
西部ガス(株)	299,400	299,400	取引関係の維持・強化の為	有
	511	636		
日本製鉄(株)	180,471	180,471	取引関係の維持・強化の為	無(注2)
	413	339		
双日(株)	157,080	157,080	取引関係の維持・強化の為	無
	394	271		
(株)ゼンリン	351,000	351,000	株式の安定化の為	有
	290	348		
エア・ウォーター(株)	150,529	140,000	取引関係の維持・強化の為	無
	231	248		
U B E (株)	53,620	53,620	株式の安定化の為	無(注2)
	103	107		
(株)コスモスイニシア	185,000	185,000	取引関係の維持・強化の為	無
	89	85		
凸版印刷(株)	44,000	44,000	取引関係の維持・強化の為	有
	85	94		
第一生命ホールディ ングス(株)	21,200	21,200	取引関係の維持・強化の為	無(注2)
	63	49		
ユアサ商事(株)	9,955	9,537	取引関係の維持・強化の為 (注3)	無
	36	28		
グランディハウス(株)	34,988	31,340	取引関係の維持・強化の為 株式数が増加した理由は、取引先持株会 を通じた株式の取得によるものでありま す。	無
	19	15		
(株)めぶきフィナン シャルグループ	40,000	40,000	取引関係の維持・強化の為	無
	13	9		
OCHIホールディ ングス(株)	7,489	7,065	取引関係の維持・強化の為 (注3)	無
	9	9		
北海道ガス(株)	4,041	3,555	取引関係の維持・強化の為 (注3)	無
	6	5		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
カメイ(株)	3,630	3,630	取引関係の維持・強化の為 (注3)	無
	4	3		
K&Oエナジーグループ(株)	1,161	1,161	取引関係の維持・強化の為	無
	2	1		
土屋ホールディングス(株)	5,000	5,000	取引関係の維持・強化の為 (注3)	無
	0	0		

(注) 1. 当社は、特定投資株式における定量的な保有効果の記載が困難であるため、記載しておりません。特定投資株式につきましては、毎期、投資先ごとに保有目的等の定性面や経済的合理性等を総合的に勘案し、保有の合理性を検証することとしております。

2. 保有先企業は当社の株式を保有していませんが、同社子会社が当社の株式を保有しています。

3. 2022年4月に連結子会社であった(株)サンポットを吸収合併したことから、保有株式数が増加しております。

保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	-	-	-	-
非上場株式以外の株式	9	261	9	269

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額(百万円)	売却損益の 合計額(百万円)	評価損益の 合計額(百万円)
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	5	-	44 (36)

(注) 「評価損益の合計額」の()は外書きで、当事業年度の減損処理額であります。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。
また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2022年1月1日から2022年12月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2022年1月1日から2022年12月31日まで）の財務諸表について、仰星監査法人による監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,260	4,971
受取手形及び売掛金	3,830	-
受取手形、売掛金及び契約資産	-	3,490
有価証券	10,287	4,709
商品及び製品	4,530	5,181
仕掛品	643	646
原材料及び貯蔵品	1,687	3,068
その他	315	427
貸倒引当金	5	5
流動資産合計	29,022	28,081
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	2,191,174	2,191,775
減価償却累計額	13,105	13,645
建物及び構築物(純額)	6,068	6,130
機械装置及び運搬具	2,13,720	2,14,013
減価償却累計額	11,474	11,765
機械装置及び運搬具(純額)	2,246	2,247
土地	2,14,499	2,14,473
建設仮勘定	197	118
その他	2,11,637	2,11,584
減価償却累計額	11,381	11,389
その他(純額)	255	194
有形固定資産合計	23,266	23,165
無形固定資産	220	320
投資その他の資産		
投資有価証券	1,84,175	1,85,337
長期貸付金	249	226
繰延税金資産	162	626
その他	376	382
貸倒引当金	0	0
投資その他の資産合計	84,964	86,573
固定資産合計	108,451	110,058
資産合計	137,473	138,140

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	3,454	3,430
短期借入金	30	-
未払法人税等	655	1,027
賞与引当金	223	309
製品補償損失引当金	67	66
製品保証引当金	63	215
未払金	770	818
未払費用	83	82
預り金	1,096	1,118
その他	199	701
流動負債合計	7,745	8,644
固定負債		
繰延税金負債	207	-
退職給付に係る負債	790	545
その他	429	370
固定負債合計	1,427	915
負債合計	9,172	9,560
純資産の部		
株主資本		
資本金	7,000	7,000
資本剰余金	3,568	3,552
利益剰余金	117,695	117,719
自己株式	2,607	672
株主資本合計	125,655	127,599
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	2,563	749
退職給付に係る調整累計額	81	231
その他の包括利益累計額合計	2,645	980
純資産合計	128,300	128,579
負債純資産合計	137,473	138,140

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】
【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
売上高	44,858	1 49,792
売上原価	2, 4 33,738	2, 4 37,858
売上総利益	11,120	11,933
販売費及び一般管理費	3, 4 8,901	3, 4 8,964
営業利益	2,219	2,969
営業外収益		
受取利息	787	769
受取配当金	308	384
不動産賃貸料	602	628
売電収入	558	581
その他	350	480
営業外収益合計	2,607	2,844
営業外費用		
支払利息	7	7
不動産賃貸費用	264	263
売上割引	214	-
売電費用	184	168
その他	14	4
営業外費用合計	684	444
経常利益	4,141	5,370
特別利益		
固定資産売却益	5 2	5 67
特別利益合計	2	67
特別損失		
固定資産処分損	6 0	6 1
投資有価証券評価損	-	36
特別損失合計	0	38
税金等調整前当期純利益	4,143	5,399
法人税、住民税及び事業税	1,295	1,595
法人税等調整額	65	63
法人税等合計	1,229	1,532
当期純利益	2,913	3,866
親会社株主に帰属する当期純利益	2,913	3,866

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
当期純利益	2,913	3,866
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	232	1,814
退職給付に係る調整額	101	149
その他の包括利益合計	333	1,664
包括利益	3,247	2,202
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	3,247	2,202

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2021年1月1日 至 2021年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,000	3,568	115,962	2,607	123,922
当期変動額					
剰余金の配当			1,181		1,181
親会社株主に帰属する当期純利益			2,913		2,913
自己株式の取得				0	0
自己株式の消却					-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	-	1,732	0	1,732
当期末残高	7,000	3,568	117,695	2,607	125,655

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	2,330	19	2,311	126,234
当期変動額				
剰余金の配当				1,181
親会社株主に帰属する当期純利益				2,913
自己株式の取得				0
自己株式の消却				-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	232	101	333	333
当期変動額合計	232	101	333	2,066
当期末残高	2,563	81	2,645	128,300

当連結会計年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,000	3,568	117,695	2,607	125,655
当期変動額					
剰余金の配当			1,250		1,250
親会社株主に帰属する当期純利益			3,866		3,866
自己株式の取得				672	672
自己株式の消却		15	2,592	2,607	-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	15	24	1,935	1,943
当期末残高	7,000	3,552	117,719	672	127,599

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	2,563	81	2,645	128,300
当期変動額				
剰余金の配当				1,250
親会社株主に帰属する当期純利益				3,866
自己株式の取得				672
自己株式の消却				-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	1,814	150	1,664	1,664
当期変動額合計	1,814	150	1,664	278
当期末残高	749	231	980	128,579

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	4,143	5,399
減価償却費	1,241	1,164
賞与引当金の増減額(は減少)	2	86
製品補償損失引当金の増減額(は減少)	8	1
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	107	256
受取利息及び受取配当金	1,096	1,153
支払利息	7	7
有価証券及び投資有価証券売却損益(は益)	-	58
投資有価証券評価損益(は益)	-	36
為替差損益(は益)	132	213
固定資産処分損益(は益)	0	1
売上債権の増減額(は増加)	759	780
棚卸資産の増減額(は増加)	556	2,033
仕入債務の増減額(は減少)	363	249
預り金の増減額(は減少)	20	21
その他	37	932
小計	4,673	2,902
利息及び配当金の受取額	1,180	1,258
利息の支払額	7	7
法人税等の支払額	1,321	1,234
営業活動によるキャッシュ・フロー	4,525	2,918
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の売却及び償還による収入	5,767	9,970
有形及び無形固定資産の取得による支出	1,280	1,147
有形及び無形固定資産の売却による収入	3	195
投資有価証券の取得による支出	9,303	9,591
投資有価証券の売却及び償還による収入	536	1,303
定期預金の預入による支出	-	200
定期預金の払戻による収入	100	-
貸付けによる支出	21	41
貸付金の回収による収入	87	63
投資活動によるキャッシュ・フロー	4,111	553
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	100	30
長期借入金の返済による支出	60	-
自己株式の取得による支出	0	672
配当金の支払額	1,181	1,250
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,341	1,953
現金及び現金同等物に係る換算差額	16	31
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	910	1,550
現金及び現金同等物の期首残高	3,853	2,942
現金及び現金同等物の期末残高	2,942	4,493

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 3社

連結子会社名 (株)大阪テクノクラート
(株)インサイトエナジー
サンポットエンジニアリング(株)

前連結会計年度において連結子会社でありましたサンポット株式会社は、当社を存続会社とする吸収合併により消滅したため、連結の範囲から除外しております。

(2) 主要な非連結子会社名

長府機工(株)

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、小規模であり、総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した非連結子会社及び関連会社の数及び主要な会社等の名称

該当事項はありません。

(2) 持分法を適用しない主要な非連結子会社及び関連会社の名称等

長府機工(株)

(持分法を適用しない理由)

持分法を適用していない非連結子会社または関連会社は、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうちサンポットエンジニアリング(株)の決算日は11月30日であります。

連結財務諸表の作成にあたっては、同決算日現在の財務諸表を使用しております。ただし、12月1日から決算日12月31日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

イ 有価証券

(イ) 其他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は主として移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

ロ 棚卸資産

(イ) 製品・商品・貯蔵品

当社は、先入先出法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を、連結子会社は主として移動平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

(ロ) 原材料・仕掛品

当社は、先入先出法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を、連結子会社は主として個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

イ 有形固定資産（リース資産を除く）

当社及び連結子会社は、定率法を採用しております。

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物	3～50年
機械装置	4～17年
工具器具備品	2～20年

ロ 無形固定資産（リース資産を除く）

当社及び連結子会社は、定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（3年～5年）に基づいております。

ハ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

当社及び連結子会社は、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

イ 貸倒引当金

当社及び連結子会社は、売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

ロ 賞与引当金

当社及び連結子会社は、従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額の当連結会計年度負担額を計上しております。

ハ 製品補償損失引当金

当社及び連結子会社は、製品補償に係る損失に備えるため、当該見込額を計上しております。

ニ 製品保証引当金

当社は、製品販売後のアフターサービス費用に備えるため、売上高を基準として過去の実績負担率により算定した額を基礎に計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5～10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループの顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は以下のとおりであります。

イ 商品及び製品の販売

当社グループは主として給湯機器・空調機器の製造・販売を行っており、これらの販売については製品の引渡時点において顧客が当該製品に対する支配を獲得することから、当該製品の引渡時点で収益を認識しております。なお、日本国内の販売については、出荷時点と引渡時点の期間が通常の間であるため、出荷時点で当該製品の収益を認識しております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクを負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(重要な会計上の見積り)
該当事項はありません。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。これにより、従来は販売費及び一般管理費に計上していた販売促進費の一部及び営業外費用に計上していた売上割引については、売上高より控除する方法に変更しております。また、従来は有償支給した原材料等の支給品について消滅を認識しておりましたが、支給品を買い戻す義務を負っている場合、当該支給品の消滅を認識しない方法に変更しております。なお、「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2021年3月26日)第98項に定める代替的な取扱いを適用し、商品又は製品の国内の販売において、出荷時から当該商品又は製品の支配が顧客に移転される時までの期間が通常の期間である場合には、出荷時に収益を認識しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当連結会計年度の売上高は199百万円減少し、売上総利益及び営業利益は199百万円それぞれ減少しておりますが、営業外費用も199百万円減少したため、経常利益及び税金等調整前当期純利益に与える影響はありません。また、利益剰余金の当期首残高への影響はありません。

なお、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度に係る「収益認識関係」注記については記載していません。

収益認識会計基準等を適用したため、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「受取手形及び売掛金」は、当連結会計年度より「受取手形、売掛金及び契約資産」に含めて表示することといたしました。なお、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度について新たな表示方法により組替えを行っていません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することといたしました。なお、連結財務諸表に与える影響はありません。

また、「金融商品関係」注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うことといたしました。ただし、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2019年7月4日)第7-4項に定める経過的な取扱いに従って、当該注記のうち前連結会計年度に係るものについては記載していません。

(表示方法の変更)

前連結会計年度において、「流動負債」の「その他」に含めていた「製品保証引当金」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動負債」の「その他」に表示していた263百万円は、「製品保証引当金」63百万円、「その他」199万円として組替えております。

(追加情報)

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響に関する会計上の見積り)

新型コロナウイルス感染症による当社グループへの影響は、収束時期の見通しが不透明な状況にあります
が、連結財務諸表作成時点においては、当連結会計年度末の会計上の見積りに大きな影響を与えるもの
ではないと想定しております。

なお、今後の新型コロナウイルス感染症の経済活動への影響等には不確定要素も多いため、想定に
変化が生じた場合、当社グループの財政状態、経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(製品保証引当金)

従来、製品の無償サービス費用については、無償サービスの実施時に費用処理しておりましたが、
当連結会計年度から、収益認識会計基準等の適用に加え、過年度の実績値の把握ができるように
管理体制を整備したため、当連結会計年度から過去の支出実績率を基礎に計算した無償サービスの
費用見込額を製品保証引当金として計上しております。

これに伴い、費用見込額150百万円を販売費及び一般管理費に計上しております。この結果、
従来と同一の方法を採用した場合と比べて営業利益、経常利益及び税金等調整前当期純利益が
150百万円減少しております。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社及び関連会社に対するものは次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
投資有価証券(株式)	144百万円	144百万円

2 有形固定資産の圧縮記帳額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
建物及び構築物	169百万円	169百万円
機械装置及び運搬具	57	57
土地	778	778
その他	2	2

3 連結会計年度末日満期手形(期日現金を含む)

連結会計年度末日満期手形(期日現金を含む)の会計処理については、手形交換日及び出金日をもって決済処理をしております。なお、当連結会計年度の末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形(期日現金を含む)が連結会計年度末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
受取手形	218百万円	185百万円
支払手形	29	43
買掛金	290	246

4 顧客との契約から生じた債権、契約資産及び契約負債の金額については、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係)(3) 契約資産及び契約負債の残高等」に記載しております。

(連結損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係)(1)顧客との契約から生じる収益を分解した情報」に記載しております。

2 期末棚卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次の棚卸資産評価損が売上原価に含まれております。

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
	23百万円	4百万円

3 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
給料手当	3,263百万円	3,243百万円
賞与引当金繰入額	117	147
製品保証引当金繰入額	3	151
広告宣伝費	390	404
輸送費	1,551	1,675
退職給付費用	202	174

4 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
	1,357百万円	1,325百万円

5 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

前連結会計年度(自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)

固定資産売却益の主なものは、機械装置及び運搬具の売却であります。

当連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

固定資産売却益の主なものは、土地、建物及び構築物の売却であります。

6 固定資産処分損の内容は次のとおりであります。

前連結会計年度(自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)

固定資産処分損の主なものは、機械装置及び運搬具の処分損であります。

当連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

固定資産処分損の主なものは、機械装置及び運搬具の処分損であります。

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	261百万円	2,476百万円
組替調整額	-	21
税効果調整前	261	2,498
税効果額	28	684
その他有価証券評価差額金	232	1,814
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	88百万円	276百万円
組替調整額	57	65
税効果調整前	145	210
税効果額	44	61
退職給付に係る調整額	101	149
その他の包括利益合計	333	1,664

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(千株)	当連結会計年度増加 株式数(千株)	当連結会計年度減少 株式数(千株)	当連結会計年度末株 式数(千株)
発行済株式				
普通株式	35,980	-	-	35,980
合計	35,980	-	-	35,980
自己株式				
普通株式(注)	1,241	0	-	1,241
合計	1,241	0	-	1,241

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加0千株であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当 額(円)	基準日	効力発生日
2021年3月26日 定時株主総会	普通株式	555	16	2020年12月31日	2021年3月29日
2021年8月3日 取締役会	普通株式	625	18	2021年6月30日	2021年8月20日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の 総額 (百万円)	配当金の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年3月25日 定時株主総会	普通株式	625	利益剰余金	18	2021年12月31日	2022年3月28日

当連結会計年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（千株）	当連結会計年度増加 株式数（千株）	当連結会計年度減少 株式数（千株）	当連結会計年度末株 式数（千株）
発行済株式				
普通株式（注）1	35,980	-	1,241	34,739
合計	35,980	-	1,241	34,739
自己株式				
普通株式（注）2	1,241	336	1,241	336
合計	1,241	336	1,241	336

（注）1. 普通株式の発行済株式の株式数の減少1,241千株は、自己株式の消却による減少1,241千株であります。

2. 普通株式の自己株式の増加336千株は、取締役会決議による自己株式の取得によるものであり、減少1,241千株は、自己株式の消却による減少1,241千株であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり配当 額（円）	基準日	効力発生日
2022年3月25日 定時株主総会	普通株式	625	18	2021年12月31日	2022年3月28日
2022年8月9日 取締役会	普通株式	625	18	2022年6月30日	2022年8月22日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の 総額 （百万円）	配当金の原資	1株当たり 配当額 （円）	基準日	効力発生日
2023年3月24日 定時株主総会	普通株式	688	利益剰余金	20	2022年12月31日	2023年3月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 2021年1月1日 至 2021年12月31日）	当連結会計年度 （自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）
現金及び預金勘定	3,260百万円	4,971百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	480	680
取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資 （有価証券）	162	201
現金及び現金同等物	2,942	4,493

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引

(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

車輛運搬具であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については原則として信用力の高い金融機関に対する預金や安全性の高い債券等に限定し、また、資金調達については銀行借入による方針です。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社グループの与信管理規程に則り、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を定期的にモニタリングし、財務状態等の悪化による貸倒懸念の早期把握と軽減を図っております。

有価証券及び投資有価証券である株式及び債券については、発行会社の信用リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。これらについては、定期的に時価や発行体の財務状況の把握を行い、継続的に保有状況の見直しを行っております。

営業債務である支払手形及び買掛金並びに未払金は、1年以内の支払期日です。

短期借入金は主に営業取引に係る運転資金の調達であり、短期の国内市場の金利状況を反映した変動金利での資金調達を行っております。

営業債務及び借入金は、流動性リスクに晒されていますが、当社グループでは、毎月及び適時に資金繰計画を作成するなどの方法により管理しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度(2021年12月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
有価証券及び投資有価証券	94,278	94,278	-
資産計	94,278	94,278	-

(注)1. 現金については注記を省略しており、預金、受取手形及び売掛金、支払手形及び買掛金、未払金については短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、注記を省略しております。

(注)2. 以下の金融商品については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「有価証券及び投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

区分	前連結会計年度(百万円)
非上場株式	185

当連結会計年度（2022年12月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
有価証券及び投資有価証券	87,491	87,491	-
資産計	87,491	87,491	-

(注)1. 現金については注記を省略しており、預金、受取手形及び売掛金、支払手形及び買掛金、未払金については短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、注記を省略しております。

(注)2. 市場価格のない株式等は、「有価証券及び投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

区分	当連結会計年度(百万円)
非上場株式	2,556

(注) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（2021年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	3,260	-	-	-
受取手形及び売掛金	8,301	-	-	-
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券				
(1) 国債・地方債等	-	-	-	-
(2) 社債	10,068	37,015	30,856	3,776
合計	21,629	37,015	30,856	3,776

当連結会計年度（2022年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	4,971	-	-	-
受取手形、売掛金及び契約資産	9,082	-	-	-
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券				
(1) 国債・地方債等	-	-	-	-
(2) 社債	4,506	40,072	27,523	7,900
合計	18,559	40,072	27,523	7,900

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産または負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表上に計上している金融商品

当連結会計年度(2022年12月31日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券				
株式	8,783	1,020	-	9,803
債券	-	77,438	-	77,438
その他	-	248	-	248
資産計	8,783	78,707	-	87,491

(注)1. 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

有価証券及び投資有価証券

上場株式及び債券は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

一方で、当社が保有している債券は、市場での取引頻度が低く、活発な市場における相場価格とは認められないため、その時価をレベル2の時価に分類しております。

(2) 時価で連結貸借対照表上に計上している金融商品以外の金融商品

該当事項はありません。

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2021年12月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	8,200	5,120	3,080
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	59,065	58,278	787
	その他	-	-	-
(3) その他	59	53	5	
	小計	67,325	63,451	3,873
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	2,874	3,169	295
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	23,179	23,448	269
	その他	-	-	-
(3) その他	899	899	-	
	小計	26,952	27,517	564
	合計	94,278	90,969	3,308

(注)非上場株式のうち、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるもの(連結貸借対照表計上額185百万円)については、上表の「その他有価証券」には含めておりません。また、表中の「取得原価」は、減損処理後の帳簿価額であります。

当連結会計年度(2022年12月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	8,669	6,192	2,477
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	24,701	24,219	482
	その他	-	-	-
(3) その他	-	-	-	
	小計	33,371	30,411	2,959
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	1,133	1,162	28
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	52,737	54,854	2,117
	その他	-	-	-
(3) その他	248	251	3	
	小計	54,119	56,269	2,149
	合計	87,491	86,680	810

(注)非上場株式のうち、市場価格のないもの(連結貸借対照表計上額2,556百万円)については、上表の「その他有価証券」には含めておりません。また、表中の「取得原価」は、減損処理後の帳簿価額であります。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	500	-	-
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	500	-	-

当連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	-	-	-
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	664	58	-
その他	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	664	58	-

3. 減損処理を行った有価証券

当連結会計年度において、有価証券について36百万円(その他有価証券の株式36百万円)減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ30%以上下落した場合には全て減損処理を行っております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社および一部の連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、確定給付型の制度として確定給付企業年金制度を採用しております。なお、一部の連結子会社は、中小企業退職金共済制度を採用しております。

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

2. 確定給付制度(簡便法を適用した制度を除く)

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
退職給付債務の期首残高	9,991百万円	9,831百万円
勤務費用	523	497
利息費用	7	10
数理計算上の差異の発生額	72	325
退職給付の支払額	618	591
合併による増減	-	1,087
退職給付債務の期末残高	9,831	8,336

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
年金資産の期首残高	9,104百万円	9,051百万円
期待運用収益	136	122
数理計算上の差異の発生額	15	49
事業主からの拠出額	413	423
退職給付の支払額	618	591
合併による増減	-	1,155
年金資産の期末残高	9,051	7,801

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
積立型制度の退職給付債務	9,831百万円	8,336百万円
年金資産	9,051	7,801
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	780	534
退職給付に係る負債	780	534
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	780	534

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
勤務費用	523百万円	497百万円
利息費用	7	10
期待運用収益	136	122
数理計算上の差異の費用処理額	57	15
過去勤務費用の費用処理額	-	-
確定給付制度に係る退職給付費用	452	370

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
過去勤務費用	- 百万円	- 百万円
数理計算上の差異	145	210
合 計	145	210

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
未認識過去勤務費用	- 百万円	- 百万円
未認識数理計算上の差異	157	368
合 計	157	368

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
一般勘定	96.8%	100.0%
債券	0.2	-
株式	1.5	-
その他	1.5	-
合 計	100.0	100.0

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
割引率	0.0~0.75%	0.5%
長期期待運用収益率	1.5	1.5
予想昇給率	主として2021年9月30日を 基準日として算定した年齢別 昇給指数を使用しております。	主として2022年9月30日を 基準日として算定した年齢別 昇給指数を使用しております。

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	11百万円	10百万円
退職給付費用	0	3
退職給付の支払額	0	3
制度への拠出額	-	-
退職給付に係る負債の期末残高	10	10

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
積立型制度の退職給付債務	40百万円	37百万円
年金資産	29	26
	10	10
非積立型制度の退職給付債務	-	-
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	10	10
退職給付に係る負債	10	10
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	10	10

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度0百万円 当連結会計年度3百万円

4. 複数事業主制度

確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の厚生年金基金制度への要拠出額は、前連結会計年度44百万円、当連結会計年度16百万円であります。なお、複数事業主制度の直近の積立状況、掛金に占める割合等については、当連結会計年度に厚生年金基金より脱退しているため記載しておりません。

(1) 複数事業主制度の直近の積立状況

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
年金資産の額	15,616百万円	- 百万円
年金財政計算上の数理債務の額と 最低責任準備金の額との合計額	11,543	-
差引額	4,073	-

(2) 複数事業主制度の掛金に占める当社グループの割合

前連結会計年度 4.4% (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
当連結会計年度 - % (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(3) 補足説明

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高(前連結会計年度1,166百万円、当連結会計年度 - 百万円)及び別途積立金(前連結会計年度3,776百万円、当連結会計年度 - 百万円)であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は期間6年9ヶ月の元利均等償却であり、当社グループは、連結財務諸表上、当該償却に充てられる特別掛金(前連結会計年度29百万円、当連結会計年度2百万円)を費用処理しております。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

5. 確定拠出制度

連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度1百万円、当連結会計年度1百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	51百万円	73百万円
賞与引当金	68	94
製品補償損失引当金	20	20
製品保証引当金(注)	19	65
有価証券・投資有価証券評価損	433	414
退職給付に係る負債	285	204
土地評価損	95	95
建物評価損	57	52
その他	257	219
小計	1,288	1,240
評価性引当額	561	543
合計	727	697
繰延税金負債		
特別償却準備金	31	-
その他有価証券評価差額金	723	39
その他	17	31
合計	772	70
繰延税金資産負債の純額	45	626

(注) 前連結会計年度において、「繰延税金資産」の「その他」に含めていた「製品保証引当金」は、金額の重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の内訳の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の「繰延税金資産」の内訳において、「その他」に表示していた276百万円は、「製品保証引当金」19百万円、「その他」257百万円として組替えております。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当連結会計年度 (2022年12月31日)
法定実効税率	30.5%	30.5%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4	0.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.5	0.4
評価性引当額の増減	0.1	0.3
税額控除	2.5	2.1
その他	1.8	0.5
税効果会計適用後の法人税等の負担率	29.7	28.4

(企業結合等関係)

(連結子会社の吸収合併)

当社は、2021年12月17日開催の取締役会決議に基づき、2022年4月1日付で、当社の連結子会社であったサンポット株式会社を吸収合併いたしました。

1. 取引の概要

(1) 被結合企業の名称及び当該事業の内容

被合併企業の名称：サンポット株式会社

事業の内容：空調機器の製造、販売等

(2) 企業結合日

2022年4月1日

(3) 企業結合の法的形式

当社を存続会社、サンポット株式会社を消滅会社とする吸収合併

(4) 結合後企業の名称

株式会社長府製作所

(5) その他取引の概要に関する事項

当社グループ全体で保有する経営資源の効率化を進め、組織及び事業の合理化を図ることを目的としております。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 2019年1月16日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号 2019年1月16日)に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度(自2021年1月1日 至2021年12月31日)

当社では、東京都、福岡県その他の地域において、賃貸収益を得ることを目的として賃貸オフィスビル等を保有しております。なお、賃貸オフィスビルの一部については、当社が使用しているため、賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産としております。

これら、賃貸等不動産及び賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産に関する連結貸借対照表計上額、当期増減額及び時価は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額			当期末の時価
	前期末残高	当期増減額	当期末残高	
賃貸等不動産	2,953	76	2,876	2,732
賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産	4,072	88	3,984	7,102

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。

2. 当期増減額のうち、主な増加額は賃貸等不動産の取得によるものであり、主な減少額は減価償却による減少であります。

3. 当連結会計年度末の時価は、主要な物件については社外の不動産鑑定士による不動産鑑定評価基準に基づく金額、その他の物件については重要性が乏しいことから、固定資産税評価額等の適切に市場価格を反映していると考えられる指標に基づく価格で算定したものであります。ただし、直近の評価時点から、一定の評価額や適切に市場価格を反映していると考えられる指標に重要な変動が生じていない場合には、当該評価額や指標を用いて調整した金額によっております。

また、賃貸等不動産及び賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産に関する2022年12月期における損益は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	賃貸収益	賃貸費用	差額	その他
賃貸等不動産	231	84	146	-
賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産	371	180	191	-

当連結会計年度（自2022年1月1日 至2022年12月31日）

当社は、東京都、福岡県その他の地域において、賃貸収益を得ることを目的として賃貸オフィスビル等を保有しております。なお、賃貸オフィスビルの一部については、当社が使用しているため、賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産としております。

これら、賃貸等不動産及び賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産に関する連結貸借対照表計上額、当期増減額及び時価は、次のとおりであります。

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額			当期末の時価
	前期末残高	当期増減額	当期末残高	
賃貸等不動産	2,876	73	2,803	2,685
賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産	3,984	84	3,899	7,101

- （注）1．連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。
2．当期増減額のうち、主な減少額は減価償却による減少であります。
3．当連結会計年度末の時価は、主要な物件については社外の不動産鑑定士による不動産鑑定評価基準に基づく金額、その他の物件については重要性が乏しいことから、固定資産税評価額等の適切に市場価格を反映していると考えられる指標に基づく価格で算定したものであります。ただし、直近の評価時点から、一定の評価額や適切に市場価格を反映していると考えられる指標に重要な変動が生じていない場合には、当該評価額や指標を用いて調整した金額によっております。

また、賃貸等不動産及び賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産に関する2022年12月期における損益は、次のとおりであります。

（単位：百万円）

	賃貸収益	賃貸費用	差額	その他
賃貸等不動産	256	81	175	-
賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産	371	182	189	-

（収益認識関係）

顧客との契約から生じる収益を分解した情報

主要な財又はサービス別に分解した収益の情報は以下のとおりであります。

当連結会計年度（自2022年1月1日 至2022年12月31日）

（単位：百万円）

	製品の種類別区分					合計
	給湯機器	空調機器	システム機器	ソーラー機器・その他	エンジニアリング部門	
一時点で移転される財又はサービス	21,914	20,209	1,379	2,810	1,363	47,675
一定期間にわたり移転される財又はサービス	-	-	-	-	2,117	2,117
顧客との契約から生じる収益	21,914	20,209	1,379	2,810	3,480	49,792

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「連結財務諸表の作成のための基本となる重要な事項に関する注記 4. 会計方針に関する事項(5) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

契約資産及び契約負債の残高等

(単位：百万円)

	当連結会計年度
顧客との契約から生じた債権(期首残高)	8,188
顧客との契約から生じた債権(期末残高)	8,933
契約資産(期首残高)	113
契約資産(期末残高)	148
契約負債(期首残高)	70
契約負債(期末残高)	61

契約資産は、主に顧客との工事契約について、期末時点で進捗度の測定に基づいて認識した売上収益に係る未請求部分であります。契約資産は、対価に対する当社の権利が無条件になった時点で顧客との契約から生じた債権に振り替えられます。当該工事契約における取引の対価は、それぞれの受注契約ごとの支払条件に基づいて請求し、受領しております。

契約負債は、主に顧客からの前受金に関連するものであり、収益の認識に伴い取り崩されます。当連結会計年度に認識された収益の額のうち、期首現在の契約負債残高に含まれていた額に重要性はありません。

残存履行義務に配分された取引価格

当連結会計年度末における残存履行義務に配分された取引価格の総額は514百万円であり、当社グループは、当該残存履行義務について、履行義務の充足につれて概ね1年以内で収益を認識することを見込んでいます。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前連結会計年度(自2021年1月1日至2021年12月31日)及び当連結会計年度(自2022年1月1日至2022年12月31日)

当社グループは住宅関連機器の製造、販売の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度(自2021年1月1日至2021年12月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自2022年1月1日 至2022年12月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自2021年1月1日 至2021年12月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2022年1月1日 至2022年12月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自2021年1月1日 至2021年12月31日）

単一セグメントのため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自2022年1月1日 至2022年12月31日）

単一セグメントのため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自2021年1月1日 至2021年12月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2022年1月1日 至2022年12月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度（自2021年1月1日 至2021年12月31日）

重要性が乏しいため記載を省略しております。

当連結会計年度（自2022年1月1日 至2022年12月31日）

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)		当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	
1株当たり純資産額	3,693.24円	1株当たり純資産額	3,737.48円
1株当たり当期純利益	83.88円	1株当たり当期純利益	111.55円
なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。		なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。	

(注) 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	2,913	3,866
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当 期純利益(百万円)	2,913	3,866
期中平均株式数(千株)	34,739	34,665

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	-	-	-	-
1年以内に返済予定の長期借入金	30	-	-	-
1年以内に返済予定のリース債務	1	1	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	-	-	-
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	2	0	-	2024年
計	33	2	-	-

(注) 1. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

2. リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
リース債務	0	-	-	-

【資産除去債務明細表】

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	11,794	23,460	35,484	49,792
税金等調整前四半期(当期)純利益(百万円)	1,013	2,228	3,600	5,399
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益(百万円)	723	1,608	2,543	3,866
1株当たり四半期(当期)純利益(円)	20.83	46.31	73.26	111.55

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益(円)	20.83	25.48	26.95	38.17

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年12月31日)	当事業年度 (2022年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,545	4,030
受取手形	2,573	2,763
売掛金	3,066	5,929
有価証券	10,287	4,709
商品及び製品	2,995	5,139
仕掛品	630	645
原材料及び貯蔵品	1,455	3,023
その他	285	407
貸倒引当金	1	2
流動資産合計	20,839	26,645
固定資産		
有形固定資産		
建物	4,818	5,786
構築物	252	325
機械及び装置	2,165	2,211
車両運搬具	10	14
工具、器具及び備品	191	191
土地	13,984	14,453
リース資産	0	1
建設仮勘定	197	118
有形固定資産合計	21,620	23,103
無形固定資産		
ソフトウェア	163	166
のれん	-	9
その他	22	141
無形固定資産合計	186	317
投資その他の資産		
投資有価証券	83,738	84,964
関係会社株式	4,428	326
従業員に対する長期貸付金	249	226
保険積立金	238	246
差入保証金	78	89
繰延税金資産	-	684
その他	30	23
貸倒引当金	0	0
投資その他の資産合計	88,763	86,560
固定資産合計	110,570	109,982
資産合計	131,409	136,627

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年12月31日)	当事業年度 (2022年12月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	-	86
買掛金	3 2,136	3 3,968
未払金	666	827
未払費用	25	3 73
預り金	1,065	1,111
未払法人税等	612	897
製品補償損失引当金	45	66
製品保証引当金	-	215
賞与引当金	139	291
役員賞与引当金	26	26
その他	41	567
流動負債合計	4,759	8,131
固定負債		
長期未払金	95	95
繰延税金負債	212	-
退職給付引当金	953	902
長期預り敷金	262	262
固定負債合計	1,524	1,261
負債合計	6,284	9,392
純資産の部		
株主資本		
資本金	7,000	7,000
資本剰余金		
資本準備金	3,552	3,552
その他資本剰余金	15	-
資本剰余金合計	3,568	3,552
利益剰余金		
利益準備金	753	753
その他利益剰余金		
特別償却準備金	71	-
退職給与積立金	520	520
別途積立金	87,562	87,562
繰越利益剰余金	25,690	27,762
利益剰余金合計	114,599	116,599
自己株式	2,607	672
株主資本合計	122,559	126,478
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	2,566	755
評価・換算差額等合計	2,566	755
純資産合計	125,125	127,234
負債純資産合計	131,409	136,627

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当事業年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
売上高	1 34,763	1 44,675
売上原価	1 26,231	1 33,840
売上総利益	8,532	10,834
販売費及び一般管理費	2 6,498	2 8,068
営業利益	2,033	2,765
営業外収益		
受取利息	1	1
有価証券利息	785	767
受取配当金	357	401
不動産賃貸料	602	628
為替差益	132	213
売電収入	558	581
雑収入	192	257
営業外収益合計	1 2,630	1 2,850
営業外費用		
支払利息	7	7
売上割引	197	-
不動産賃貸費用	264	263
売電費用	184	168
雑支出	0	4
営業外費用合計	654	443
経常利益	4,009	5,172
特別利益		
固定資産売却益	2	67
抱合せ株式消滅差益	-	2,061
特別利益合計	2	2,129
特別損失		
固定資産処分損	0	1
投資有価証券評価損	-	36
特別損失合計	0	38
税引前当期純利益	4,011	7,263
法人税、住民税及び事業税	1,230	1,441
法人税等調整額	81	21
法人税等合計	1,148	1,420
当期純利益	2,863	5,843

製造原価明細書

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)		当事業年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	
		金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
材料費		17,236	70.3	23,159	73.4
外注加工費		1,219	5.0	1,530	4.8
労務費	1	4,481	18.3	4,954	15.7
経費	2	1,589	6.4	1,904	6.1
当期総製造費用		24,526	100.0	31,548	100.0
期首仕掛品棚卸高		517		630	
合計		25,043		32,178	
期末仕掛品棚卸高		630		645	
当期製品製造原価		24,413		31,533	

(注) 1. 労務費のうち、主な内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度	当事業年度
賞与引当金繰入額(百万円)	82	161

2. 経費のうち、主な内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度	当事業年度
減価償却費(百万円)	636	672

3. 原価計算の方法は総合原価計算によっております。

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2021年1月1日 至 2021年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本									
	資本金	資本剰余金			利益剰余金					
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金合計	
					特別償却準備金	退職給与積立金	別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	7,000	3,552	15	3,568	753	224	520	87,562	23,856	112,916
当期変動額										
特別償却準備金の取崩						152			152	-
剰余金の配当									1,181	1,181
当期純利益									2,863	2,863
自己株式の取得										
自己株式の消却										
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）										
当期変動額合計	-	-	-	-	-	152	-	-	1,834	1,682
当期末残高	7,000	3,552	15	3,568	753	71	520	87,562	25,690	114,599

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	2,607	120,877	2,337	2,337	123,214
当期変動額					
特別償却準備金の取崩		-			-
剰余金の配当		1,181			1,181
当期純利益		2,863			2,863
自己株式の取得	0	0			0
自己株式の消却					
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			229	229	229
当期変動額合計	0	1,681	229	229	1,911
当期末残高	2,607	122,559	2,566	2,566	125,125

当事業年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本									
	資本金	資本剰余金			利益剰余金					
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金				利益剰余金合計
						特別償却準備金	退職給与積立金	別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	7,000	3,552	15	3,568	753	71	520	87,562	25,690	114,599
当期変動額										
特別償却準備金の取崩						71			71	-
剰余金の配当									1,250	1,250
当期純利益									5,843	5,843
自己株式の取得										
自己株式の消却			15	15					2,592	2,592
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）										
当期変動額合計	-	-	15	15	-	71	-	-	2,071	2,000
当期末残高	7,000	3,552	-	3,552	753	-	520	87,562	27,762	116,599

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	2,607	122,559	2,566	2,566	125,125
当期変動額					
特別償却準備金の取崩		-			-
剰余金の配当		1,250			1,250
当期純利益		5,843			5,843
自己株式の取得	672	672			672
自己株式の消却	2,607	-			-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			1,810	1,810	1,810
当期変動額合計	1,935	3,919	1,810	1,810	2,108
当期末残高	672	126,478	755	755	127,234

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は主として移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2. 棚卸資産の評価基準及び評価方法

製品、仕掛品、原材料...主として先入先出法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法(ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 3～50年

機械及び装置 4～17年

工具、器具及び備品 2～20年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(3年～5年)に基づいております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与支給に備えるため、支給見込額のうち当事業年度に負担すべき額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員の賞与支給に備えるため、支給見込額のうち当事業年度に負担すべき額を計上しております。

(4) 製品補償損失引当金

製品補償に係る損失に備えるため、当該見込額を計上しております。

(5) 製品保証引当金

製品販売後のアフターサービス費用に備えるため、売上高を基準として過去の実績負担額を基準に算定した額を基礎に計上しております。

(6) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(5年)による定額法により翌事業年度から費用処理することとしております。

5. 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点(収益を認識する通常の時点)は以下の通りであります。

(1) 商品及び製品の販売

当社は主として給湯機器・空調機器の製品の製造・販売を行っており、これらの販売については製品の引渡時点において顧客が当該製品に対する支配を獲得することから、当該製品の引渡時点で収益を認識しております。なお、日本国内の販売については、出荷時点と引渡時点の期間が通常の期間であるため、出荷時点で当該製品の収益を認識しております。

6. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(重要な会計上の見積り)

該当事項はありません。

(会計方針の変更)

(1) 収益認識に関する会計基準等の適用

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。これにより、従来は販売費及び一般管理費に計上していた販売促進費の一部及び営業外費用に計上していた売上割引については、売上高より控除する方法に変更しております。また、従来は有償支給した原材料等の支給品について消滅を認識しておりましたが、支給品を買い戻す義務を負っている場合、当該支給品の消滅を認識しない方法に変更しております。なお、「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2021年3月26日)第98項に定める代替的な取扱いを適用し、商品又は製品の国内の販売において、出荷時から当該商品又は製品の支配が顧客に移転される時までの期間が通常の期間である場合には、出荷時に収益を認識しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取り扱いに従っており、当事業年度より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の繰越利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当事業年度の売上高は199百万円減少し、売上総利益及び営業利益は199百万円それぞれ減少しておりますが、営業外費用も199百万円減少したため、経常利益及び税引前当期純利益に与える影響はありません。また、繰越利益剰余金の当期首残高への影響はありません。

(2) 時価の算定に関する会計基準等の適用

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することといたしました。なお、財務諸表に与える影響はありません。

(表示方法の変更)

該当事項はありません。

(追加情報)

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響に関する会計上の見積り)

新型コロナウイルス感染症による当社の影響は、収束時期の見通しが不透明な状況にありますが、財務諸表作成時点においては、当事業年度末の会計上の見積りに大きな影響を与えるものではないと想定しております。

なお、今後の新型コロナウイルス感染症の経済活動への影響等には不確定要素も多いため、想定に変化が生じた場合、当社の財政状態、経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(製品保証引当金)

従来、製品の無償サービス費用については、無償サービスの実施時に費用処理しておりましたが、当事業年度から、収益認識会計基準等の適用に加え、過年度の実績値の把握ができるよう管理体制を整備したため、当事業年度から過去の支出実績率を基礎に計算した無償サービスの費用見込額を製品保証引当金として計上しております。

これに伴い、費用見込額150百万円を販売費及び一般管理費に計上しております。この結果、従来と同一の方法を採用した場合と比べて営業利益、経常利益及び税引前当期純利益が150百万円減少しております。

(貸借対照表関係)

1.有形固定資産から直接減額した圧縮記帳累計額

	前事業年度 (2021年12月31日)	当事業年度 (2022年12月31日)
建物	40百万円	144百万円
構築物	3百万円	25百万円
機械装置	-	57百万円
工具器具備品	-	2百万円
土地	728百万円	778百万円

2. 期末日満期手形(期日現金を含む)

期末日満期手形(期日現金を含む)の会計処理については、手形交換日及び出金日をもって決済処理をしております。なお、当期の末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形(期日現金を含む)が期末残高に含まれております。

	前事業年度 (2021年12月31日)	当事業年度 (2022年12月31日)
受取手形	119百万円	185百万円
支払手形	-	43
買掛金	-	246

3. 関係会社に対する金銭債権債務

	前事業年度 (2021年12月31日)	当事業年度 (2022年12月31日)
短期金銭債権	100百万円	88百万円
短期金銭債務	11百万円	36百万円

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当事業年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
営業取引による取引高		
売上高	926百万円	210百万円
仕入高	290	378
営業取引以外の取引による取引高	87	115

2. 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度87%、当事業年度86%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度13%、当事業年度14%であります。

主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2021年1月1日 至 2021年12月31日)	当事業年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)
販売運賃	1,319百万円	1,606百万円
貸倒引当金繰入額	2	0
給料手当	2,401	2,869
賞与引当金繰入額	56	130
役員賞与引当金繰入額	26	26
製品保証引当金繰入額	-	152
退職給付費用	163	155
減価償却費	153	190

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引

(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1)リース資産の内容

有形固定資産

車輛運搬具であります。

(2)リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式282百万円、関連会社株式44百万円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式4,384百万円、関連会社株式44百万円)は、市場価格のない株式等のため、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2021年12月31日)	当事業年度 (2022年12月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	46百万円	61百万円
賞与引当金	42	89
製品補償損失引当金	13	20
製品保証引当金	-	65
有価証券・投資有価証券評価損	432	414
退職給付引当金	290	275
土地評価損	-	95
建物評価損	-	52
その他	181	213
小計	1,007	1,288
評価性引当額	463	543
合計	543	745
繰延税金負債		
特別償却準備金	31	-
その他有価証券評価差額金	714	36
その他	10	24
合計	756	61
繰延税金資産負債の純額	212	684

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2021年12月31日)	当事業年度 (2022年12月31日)
法定実効税率	30.5%	30.5%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	0.2
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.9	0.4
抱合せ株式消滅差益	-	9.0
評価性引当額の増減	0.1	0.3
税額控除	2.5	1.6
その他	1.3	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	28.6	19.6

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「重要な会計方針 5.収益及び費用の計上基準」に記載しているため、注記を省略しております。

(企業結合等関係)

(共通支配下の取引等)

(連結子会社の吸収合併)

当社は、2021年12月17日開催の取締役会決議に基づき、2022年4月1日付で、当社の連結子会社であるサンポット株式会社を吸収合併いたしました。

なお、詳細につきましては、「連結注記事項(企業結合等関係)」に記載のとおりであります。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	4,818	1,343	34	340	5,786	12,155
	構築物	252	100	0	27	325	1,276
	機械及び装置	2,165	427	0	380	2,211	11,422
	車両運搬具	10	12	0	8	14	246
	工具、器具及び備品	191	273	0	273	191	11,376
	土地	13,984	562	92	-	14,453	-
	リース資産	0	2	0	0	1	5
	建設仮勘定	197	477	556	-	118	-
	計	21,620	3,199	685	1,030	23,103	36,483
無形固定資産	ソフトウェア	163	77	-	73	166	514
	のれん	-	10	-	1	9	36
	その他	22	117	-	0	140	5
	計	186	207	-	75	317	557

(注) 1. 当期増加額は以下の通りです。

建物 増加 社員寮新築工事 284百万円
 建物 増加 換気・空調システム性能試験室 86百万円
 建物 増加 落差試験室設備 54百万円
 機械及び装置 増加 レーザー複合機 212百万円
 工具、器具及び備品 増加 新製品金型代 184百万円

2. 当期減少額は以下の通りです。

土地 減少 売却 92百万円

3. 当期増加額には、サンボット株式会社との吸収合併による増加額が次のとおり含まれています。

建物 908百万円
 構築物 71百万円
 機械及び装置 42百万円
 車輛運搬具 1百万円
 工具、器具及び備品 58百万円
 土地 494百万円
 リース資産 2百万円
 電話加入権(無形固定資産「その他」) 5百万円
 ソフトウェア 14百万円
 のれん 10百万円

4. 有形固定資産から直接減額した圧縮記帳累計額は、1,008百万円であります。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	1	4	3	2
製品補償損失引当金	45	21	0	66
製品保証引当金	-	278	63	215
賞与引当金	139	427	274	291
役員賞与引当金	26	26	26	26

(注) 貸倒引当金、製品補償損失引当金、製品保証引当金、賞与引当金の「当期増加額」には、合併による引継額が含まれております。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日まで								
定時株主総会	3月中								
基準日	12月31日								
剰余金の配当の基準日	6月30日 12月31日								
1単元の株式数	100株								
単元未満株式の買取り									
取扱場所	大阪府大阪市中央区伏見町3丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部 (特別口座)								
株主名簿管理人	東京都杉並区和泉2丁目8番4号 日本証券代行株式会社 代理人部								
取次所	東京都千代田区丸の内1丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社								
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額								
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL https://www.chofu.co.jp/								
株主に対する特典	<p>(1) 対象となる株主様 12月31日現在の当社株主名簿に記載された1単元(100株)以上かつ保有期間1年以上の株主様を対象といたします。</p> <p>(2) 株主優待の内容 保有株式数に応じてクオカードを贈呈いたします。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>保有株式数</th> <th>優待内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>100株以上 500株未満</td> <td>クオカード 2,000円分</td> </tr> <tr> <td>500株以上 1,000株未満</td> <td>クオカード 3,000円分</td> </tr> <tr> <td>1,000株以上</td> <td>クオカード 5,000円分</td> </tr> </tbody> </table>	保有株式数	優待内容	100株以上 500株未満	クオカード 2,000円分	500株以上 1,000株未満	クオカード 3,000円分	1,000株以上	クオカード 5,000円分
保有株式数	優待内容								
100株以上 500株未満	クオカード 2,000円分								
500株以上 1,000株未満	クオカード 3,000円分								
1,000株以上	クオカード 5,000円分								

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利並びに株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利以外の権利を有しておりません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第68期）（自2021年1月1日 至2021年12月31日）2022年3月31日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2022年3月31日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第69期第1四半期）（自2022年1月1日 至2022年3月31日）2022年5月13日関東財務局長に提出

（第69期第2四半期）（自2022年4月1日 至2022年6月30日）2022年8月10日関東財務局長に提出

（第69期第3四半期）（自2022年7月1日 至2022年9月30日）2022年11月8日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2023年3月30日関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書であります。

(5) 自己株券買付状況報告書

報告期間（自2022年8月1日 至2022年8月31日）2022年9月8日関東財務局長に提出

報告期間（自2022年9月1日 至2022年9月30日）2022年10月11日関東財務局長に提出

報告期間（自2022年10月1日 至2022年10月31日）2022年11月8日関東財務局長に提出

報告期間（自2022年11月1日 至2022年11月30日）2022年12月8日関東財務局長に提出

報告期間（自2022年12月1日 至2022年12月31日）2023年1月13日関東財務局長に提出

報告期間（自2023年1月1日 至2023年1月31日）2022年2月8日関東財務局長に提出

報告期間（自2023年2月1日 至2023年2月28日）2022年3月8日関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年3月24日

株式会社長府製作所

取締役会 御中

仰 星 監 査 法 人
大阪事務所

指定社員 公認会計士 平塚 博路
業務執行社員

指定社員 公認会計士 稲積 博則
業務執行社員

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社長府製作所の2022年1月1日から2022年12月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社長府製作所及び連結子会社の2022年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

株式会社長府製作所における売上高の実在性及び期間帰属の適切性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社グループは、住宅関連機器の製造販売を行っており、当連結会計年度の連結売上高49,792百万円のうち、株式会社長府製作所の売上高が約89%を占めている。</p> <p>株式会社長府製作所の取扱製品は、給湯機器、空調機器、システム機器、ソーラー機器等多品種にわたり、主要製品である給湯機器の売上は冬季に増加する傾向がある。</p> <p>売上高は重要な経営指標の一つであり、業績予想が外部投資家へ公表されていることから、予算達成のためのプレッシャーを感じる可能性がある。そのため、景気動向や天候の状況により予算達成が困難と認められる場合、実際の取引に基づかない売上の計上や期末日付近の売上高の期間帰属を歪める潜在的なリスクが存在する。</p> <p>以上から、当監査法人は株式会社長府製作所における売上高の実在性及び期間帰属の適切性を監査上の主要な検討事項であると判断した。</p>	<p>当監査法人は、株式会社長府製作所における売上高の実在性及び期間帰属の適切性を検討するにあたり、主として以下の実施した。</p> <p>(1) 内部統制の評価 売上高の実在性及び期間帰属の適切性に関連する内部統制の整備及び運用の状況の有効性を評価した。</p> <p>(2) 売上高の実在性及び期間帰属の検討 売上高の日別推移分析、製品群別売上高の推移分析、拠点別売上高の月次推移分析を実施し、特定のシナリオに基づき抽出された取引について、受注及び出荷に関する証憑と突合した。</p> <p>売上取引から無作為に抽出したサンプルについて、受注及び出荷に関する証憑と突合した。</p> <p>売掛金を対象に、金額的な重要性等に基づき抽出したサンプルについて、残高確認を実施し、帳簿残高と回答額を照合した。また、差異が生じている場合はその差異原因の妥当性を検証した。</p> <p>期末日前の売上取引から一定の基準に基づいて取引を抽出し、抽出された取引の売上計上日の根拠となる証憑と突合した。</p> <p>期末日後の多額の売上値引、返品取引の有無を関連資料の通査により確かめた。</p>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社長府製作所の2022年12月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社長府製作所が2022年12月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査等委員会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。

・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。

・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2023年3月24日

株式会社長府製作所

取締役会 御中

仰 星 監 査 法 人
大阪事務所

指定社員 公認会計士 平塚 博路
業務執行社員

指定社員 公認会計士 稲積 博則
業務執行社員

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社長府製作所の2022年1月1日から2022年12月31日までの第69期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社長府製作所の2022年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

売上高の実在性及び期間帰属の適切性

連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（株式会社長府製作所における売上高の実在性及び期間帰属の適切性）と同一内容であるため、記載を省略している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。